

上野遺跡 VI
UENO SITE

1995・3

長野県飯山市教育委員会

上野遺跡 VI
UENO SITE

1995・3

長野県飯山市教育委員会



遺跡遠望 千曲川東岸クリーンセンターより 1994.6.28
中央青屋根の建物が昭和40(1965)年建設の揚水機場，その上が調査地，右端は常盤大橋。



調査地全景 — 南から 手前が平用水水路



平安時代の墓鉦 S K 149 — 東から 左端は平用水水路



同 上 副葬品出土状態 — 南から

序

飯山市教育委員会

教育長 岩 崎 彌

飯山盆地の中央を悠々と流れる千曲川は、太古の時代より多くの恵みをわたくしたちに与えてくれています。とくに常盤地区上野・大倉崎丘陵や瑞穂関沢地区周辺の千曲川河岸には数多くの遺跡が存在し、往時より千曲川との密接な関係が指摘されています。

昭和63年および平成元年に実施された国道117号線小沼・湯滝バイパス建設に伴う発掘調査では、旧石器時代～中世館跡まで連綿として生活が営まれた痕跡が、瑞穂・常盤両地区で発見されました。殊に常盤上野遺跡では約12,000年前以上から500年前までの大規模な集落が断続的に営まれたことが判明いたしました。以降、平成2年・4年・5年にも調査が行われ、それぞれ貴重な先人の生活跡が発見されました。上野地区はまさに古代遺跡の宝庫といえる場所です。

平成6年5月、県営かんがい排水事業（揚水機場建設）に伴い事前の緊急調査を実施することになりました。調査にあたっては、高橋桂調査団長をはじめ地元上野区の多大な御協力をいただきました。また、多くの作業員の方に参加・ご協力いただき実施することができました。

ここに所期の目的を達成することができ、御協力いただいた皆様に感謝申し上げますとともに、本報告書が多くの方の市民の皆様に読まれ、郷土を知る資料となることを念願し序といたします。

平成7年2月1日

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字常盤^{いいやま}3921-18番地ほかに所在する上野^{うえの}遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 今回検出された遺跡は、旧石器・縄文・弥生・平安の各時代であるが、中心は弥生時代と、平安時代の集落址である。灰釉陶器を副葬した平安時代の墓址が注目される。
- 3 調査は県管かんがい排水事業（常盤揚水機場建設工事）に伴う発掘調査で、飯山市教育委員会が平成6年5月11日から7月2日まで実施した。
- 4 上野遺跡は過去に5回の調査報告がなされている（飯山市教育委員会『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』1989・同Ⅱ1990・同『上野遺跡』1991・同『上野遺跡Ⅳ』1994・同『上野遺跡Ⅴ』1994）ので、本報告は上野遺跡Ⅵとして報告する。
- 5 発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

飯山市遺跡調査会

顧問	小山 邦武	市長
会長	滝沢藤三郎	市教育委員長
副会長	水野 光雄	市社会教育委員長
委員	高橋 桂	市文化財保護審議会会長
	田中 広司	市議会総務文教委員長
	中村 敏	市公民館長
	小川 幹雄	教育委員会委員長職務代理
	岩崎 彌	市教育委員会教育長
事務局長	月岡 保男	市教育委員会教育次長
事務局次長	町井 和夫	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月 静雄	市教育委員会社会教育係

地元関係者

常盤公民館長	鈴木 昭悟
上野区長	中原 信
同副区長	万場喜三郎
平用水	大木 幸治・丸山 幸雄・木内 広美・小林 佑幸
上野の森の会	中原 道雄・中原 信・富岡 太重
隣接地権者	中原 賢也・小出 光雄・万場 茂喜

調査団

団 長	高橋 桂	飯山北高等学校教諭
調査主任	常盤井智行（常盤）	
調査員	小林 新治（飯山）	田村 滉城（外様）
	桃井伊都子（上倉）	小川ちか子（大深）
	望月 静雄	飯山市教育委員会事務局員

作業参加者（順不同）

小出まさ子・万場義秋（上野） 鈴木操・鈴木ため・梨元智年・小坂一葉（大倉崎） 竹内大五郎・北條辰男・小林経雄（戸狩） 樋口栄（温井） 吉越まさの（大塚） 高橋喜久治（下水沢） 清水隼人・滝沢きよえ（柳新田） 大熊さん（小沼） 山崎満枝・田中朝治（大深） 宮澤 豊（南町） 梨元美雪（大学生）

整理参加者

小林みさを（柏尾） 藤沢和枝（神明町） 川口学実（金山）

- 6 本書で使用された方位は真北であり、地区割りは国土座標第8系に準じている。
- 7 本書に掲載した平安時代の土器・陶器のスクリーントーンは、黒色処理および灰釉施釉部分を表わす。また断面黒塗りは須恵器を、断面アミ目は灰釉陶器を示す。
- 8 発掘調査にあたっては桐原健氏にご指導を賜った。記して感謝申し上げる。
- 9 本書の編集は常盤井が主体となり、望月が補佐し、高橋が統括した。文責は目次に記した。
- 10 発掘調査の図面・出土品は、市内大深の市埋蔵文化財センター(旧三中寄宿舎)で保管している。

目 次

巻頭図版 1・2

序

例 言

第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	望月 1
2 調査経過	1
A 発掘調査	小林 1
B 層 序	2
C 調査日誌抄	常盤井 2
第2章 遺跡の概要	小林 4
1 遺跡の位置と環境	4
A 地理的環境	4
B 歴史的環境	4
2 上野遺跡の概要と過去の調査	6
第3章 旧石器時代	望月 13
1 遺物の出土状態	13
A 出土層位と分布	13
B 地点分布	13
2 出土遺物	13
A 9号礫群出土石器	13
B その他の地点出土石器	16
3 9号礫群の母岩別資料について	20
第4章 縄文時代	常盤井 23
1 遺 構	23
2 遺 物	23
第5章 弥生時代	常盤井 26
1 遺 構	26
A 竪穴住居址	26
B 土 坑	26
2 遺 物	28
A 土 器	28
B 石器・石製品	30

第6章 平安時代	常盤井	31
1 遺 構		31
A 竪穴住居址		31
B 掘立柱建物址		31
C 溝・土 塚		33
2 遺 物		35
A 土器・陶器		35
B 鉄 製 品		36
第7章 ま と め	高橋	40

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

長野県飯山市の常盤地区は、千曲川が形成した広い沖積地である常盤平を中心として広がっている。集落は、長峰・上野・大倉崎丘陵や千曲川の自然堤防上に立地している。そして沖積地には水田が作られ、飯山地方の穀倉地帯となっている。しかし、千曲川に接していながら千曲川より引水することができなく、かつては遠く関田山脈中の茶屋池を水源とする延長26kmに及ぶ平用水にたよっていた。その後、大正時代になって千曲川の電気揚水が開始され、常盤平の水田地帯の水不足は大いに解消された。

平成4年、老朽化した上野地区にある揚水機場の改築が計画された（県営かんがい排水事業常盤地区）。現在の千曲川に接した場所よりやや中に入った場所で、1800㎡の面積を予定としていた。上野地区は、昭和63年の国道117号線バイパス敷設付設に伴う調査以来、数次にわたる調査によって丘陵全体が埋蔵文化財包蔵地であることが確かめられていた。このため、市役所担当課である農林課と協議し、事前に発掘調査を実施することで合意した。調査は、事業が実施される平成5年8月までに終了しなければならないため、平成5年5月から7月までの予定で進めることとした。また、事業は県営であり、事業費のうち19%が農家負担となるため、国庫補助事業とすべく平成4年12月28日付けで平成5年度文化財補助事業計画書を県教育委員会宛提出した。

平成5年6月、国庫補助申請書を提出し発掘調査の準備に取りかかったが、用地交渉と河川協議の遅れがあり、実施することができなかった。8月末になり、地方事務所、市役所農林課と協議したが用地交渉の決着が付きそうもないため、これ以上遅らせることは降雪前に調査を終了させることができないと判断し、次年度に繰り越すことを決定した。平成5年9月6日付けで長野県北信事務所長名で、正式に埋蔵文化財発掘調査の延期についての依頼が提出された。このため県文化課の指導をいただき、平成5年12月9日付けで国庫補助事業の計画変更申請書（金額を0円に変更する）を文化庁長官宛提出するとともに、次年度にあらためて申請することとした。

平成6年4月8日付け、6教第8号で法第98条の『埋蔵文化財発掘調査の通知について』を文化庁長官宛提出する。

平成6年4月25日、長野県北信地方事務所長より委託契約の依頼があり、同日付けで契約を締結した。なお、国庫補助関係については、7月15日付けで申請書を提出した。

2 調査経過

A 発掘調査

この発掘調査対象地は、常盤揚水機場建設予定地で、面積1100㎡を平成6年5月11日から7月2日まで約2箇月の発掘調査であった。

大地区割については、前回117号線拡幅部分と工場団地取付道路部分の発掘調査（1992）のときに設定した100m方眼で50区画の大地区割を用いた（図1）。今回は、29区と30区内で調査を行なった。

また、大地区内の地区割についても前回に従い5m方眼とし、南から北へ1～20、西から東へA～Tの番号を付した。従って調査日誌抄の中では、各グリッドをA-1またはT-20というふうに記載した。

調査方法は、原則として表土剥ぎ、精査、写真撮影、遺構掘り、測量、遺物の取り上げの順で行なった。

遺構・遺物の検出は移植ゴテで慎重に行なったが、遺物は黒色土の中間層からの検出が多く見られた。黒色土中の遺構掘りこみ面の検出にあたっては、適宜土層セクション帯を残すなど土層観察を試みたが、判明するに至らなかった。黒色土中の遺構検出については前回同様今後の検討課題の一つである。

遺構の掘り下げは移植ゴテを用い慎重に掘り下げを実施した。写真撮影は白黒フィルム35ミリとカラーライドフィルム35ミリフィルムで適時撮影した。測量は、遺構全体図は40分の1平板測量図を作成した。また住居址など主要遺構とともに、土器・礫群の出土遺物についても適時に10分の1または20分の1の微細図を作成した。

遺構番号は前回までの付番の次の番号から通番とした。遺構の略称については、土坑はSK、掘立柱建物はSBとし、竪穴住居址は弥生時代のものをY〇号住居址、古墳時代以降のものをH〇号住居址とした。竪穴住居址を除き時代別に分けていない。

遺物の取り上げは、遺構出土のものは遺構毎に、また、包含層のものは各グリット毎に取り上げたが、石器・礫・縄文土器については1点毎に位置と高さを測って取り上げた。

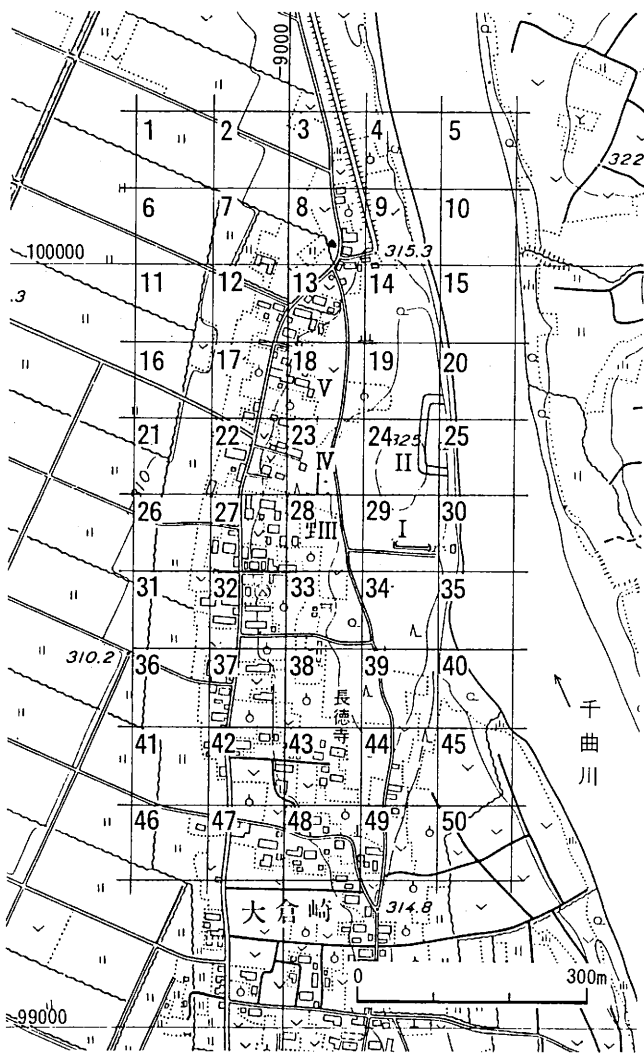


図1 上野遺跡大地区割 1:10000

B 層 序

上野遺跡の基本的な層序は、上位からI茶灰色土(表土厚さ約20cm)、II黒色土(厚さ約30cm)、III茶褐色土(漸移層厚さ約10cm)、IV黄色粘質土(ソフト厚さ約10cm)、V黄褐色粘質土(下層に近づくに従い褐色味と硬さが増す・厚さ約25cm)、VI黄褐色粘質土(上部より黄味が強く硬い。また、粘性も強く所々ブロック状となっている)である。また、溝状土坑の深さと黒色土層から弥生時代の土器の出土を考えると、縄文時代以降の遺構掘りこみ面は黒色土層内にあるものと思われる。ただし遺構確認は漸移層最上部での確認となった。また、石器・礫の検出層位は黄色粘質土の上部から漸移層にかけてである。

C 調査日誌抄

4月11日～ 市農林課・平用水・地元上野区との発掘打合せ会議、作業員募集、樹木の伐採等の調査準備を行う。

4月26・27日 重機による表土除去。

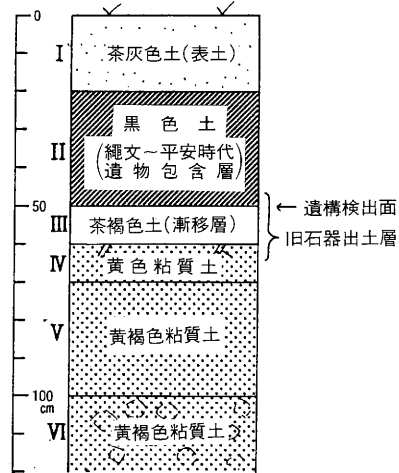


図2 土層模式図

- 4月28日 基準杭打ち。
- 5月9日 発掘器搬入、テント設営。
- 5月10日 コンテナハウス設置。
- 5月11日 発掘開始式。調査地北からジョレンがけ精査開始。木株・木根が多く難渋。
- 5月12～17日 ジョレンがけ精査と木株の処理を中心に行う。12日地元向け発掘だより「かわら版上野」発行、関係者・上野区に配布。
- 5月19日 北壁西部で黒色土層断ち割り。西端で約30cmの厚さがあることを確認。
- 5月20日～ 黒色土上面でジョレンがけ精査をするが遺構の確認はむずかしい。
- 5月23日 O・P-11・12区で弥生後期土器集中地点検出。5月25日写真撮影、微細図作成。
- 5月26日 ジョレンがけ精査続行。桐原健先生視察。
- 5月30日 O・P-10区古墳時代土器集中地点を断ち割るが遺構らしきものなし。中部土地改良区・県地方事務所関係者10数名見学。
- 6月1日 黒色土掘り下げが一段落し、遺構検出状態を写真撮影ののち遺構掘り下げにかかる。L・N-13・14区で鳥居を立てたような2か所の大形方形掘形を検出(SB20)。調査地北東で掘立柱建物址検出SB19と命名。調査地南東で隅丸方形の住居址検出、Y10住と命名。
- 6月2日 M-14区で碧玉製勾玉出土。
- 6月3日 北東隅竪穴住居址をY11住と命名。セクションベルト(土層観察用帯)を残して掘り下げ。Y10住掘り下げが浅い。支柱穴を確認。
- 6月6日 Y10住帯を残して完掘、写真撮影。出土遺物は少ない。
- 6月7日 L・M-12区黒色土中で竪穴住居址検出。8日H34住と命名。
- 6月8日 O-10区で溝状土坑検出。中原上野区長来跡、現地見学会について打合せ。
- 6月10日 H34住、抜根ののちセクションベルトを残し掘り下げ開始。
- 6月14日 雨で現地作業を中止。「かわら版上野」発行。
- 6月15日 SB19・20、H34住、Y10住柱穴等掘り下げ開始。
- 6月16日 Y10住貯蔵穴と推定されるピット半割掘り下げ、土壌分析用の土採取。SB19完掘、写真撮影。
- 6月20日 H34住掘り下げ続行。遺構輪郭表示。P2:00～常盤公民館と共催で現地見学会。約60名参加。
- 6月21日 L・N-9区で溝状の遺構検出。南半分を掘り下げ開始(SK145)。調査地北東から $\frac{1}{40}$ 平板図作成開始。
- 6月22日 H34住遺物出土状態写真撮影。溝状土坑 $\frac{1}{20}$ 実測図作成。SB20半割土層作成。
- 6月23日 H34住遺物分布図、カマド周辺微細図作成。SK145精査。東西に延びる溝状遺構となる。M-8区で掘り下げ中の土坑から灰釉陶器皿出土。土坑墓となりそうだ(SK149)。
- 6月24日 SK145掘り下げ。底は浅深がある。SK147、148、SB20など遺構完掘。
- 6月27日 SB20完掘写真撮影。SK149遺物出土状態写真撮影。SK145掘り下げ続行。N・O-13・14区黄色粘質土層掘り下げ。礫・石片出土し始める。
- 6月28日 SK145の東に直列して長方形土坑検出、SK146と命名。掘り下げ開始。O-13区旧石器調査、東の飛地30区調査開始。対岸より遺跡遠望写真撮影。北信濃新聞取材。
- 6月29日 SK145、146、149掘り下げ続行。145、146完掘状態写真撮影。30区ジョレンがけ精査。
- 6月30日 N・O-13・14区旧石器群完掘写真撮影。 $\frac{1}{10}$ 実測図作成。SK149完掘写真撮影。30区精査。
- 7月1日 雨の中旧石器取り上げ。発掘器材を撤収。上野公民館にて発掘終了式。「かわら版上野」発行。
- 7月2日 30区掘り下げ、溝状土坑1基検出。写真・測量を行い現地作業を終了。

第2章 遺跡の概要

1 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

上野^{うえの}遺跡は、長野県飯山市^{いいやま}大字常盤^{とときわ}字外和柳^{そとわやなぎ}ほかに所在している（図3）。

長野市からJR飯山線で、千曲川沿いに下り、飯山駅を通過して二つ目のところが信濃平^{しなのたいら}駅で、この駅の東側平坦部一帯が千曲川の氾濫堆積物によって形成された常盤平である。一面に水田が広がり、外様平と並びこの地方最大の穀倉地帯で、飯山盆地の中央に位置する。西側には遺跡群・古墳群を有する長峰丘陵が南北に走り、これを越えると外様平が開け、更に盆地の西縁は鍋倉山^{なべくら}（1288.6m）等比較的低い関田山地となり、越後との国境である。この山地には「塩の道」と呼ばれる幾筋かの交易道がブナ・雑木林の中に存在する。

常盤平の東側は千曲川の悠久の流れを擁し、更に飯山盆地東縁にあたる毛無山^{けなし}（1640.98m）等三国山脈^{みくに}の山なみが聳え、南は飯山市街地、北は大深の集落で画され、この平の東端部に千曲川に添う形で上野遺跡の所在する上野丘陵（この地方では、上野の森とも呼んでいる）がある。

この丘陵は、南北1.5km、東西0.5kmの細長い残丘状を呈し、東側は千曲川の浸触により断崖となり、西側は、ゆるやかに傾斜し常盤平に広がり、上野区の集落が点在している。

この丘陵上に広がる上野遺跡は、大倉崎遺跡（縄文時代）の北側にあたり、丘陵全体が遺跡と考えられている。標高約332mの小丘陵には、ブナ・ナラ等の大木が林立、森を形成して低地には見られない山ゆり・リンドウなどが植生している珍しい場所といえる。また、西斜面の所々に湧水が認められ、山菜やヤブコウジの赤い実が、住む人の気持を和らげるとともに、自然の恵みを太古から人々に与えてくれたところでもある。

平成4（1992）年国道117号線の開削により、緑と遺跡が半減するなどその姿が大きく変わりつつあることは、地域発展の道路のこととはいえ、誠に残念と言うほかはない。近い将来に於て、この上野の森の景観保持、植生への影響調査、加えて遺跡保存など積極的な対策が待たれるところである。

B 歴史的環境

この遺跡の所在する上野丘陵周辺には、数多くの遺跡が存在している。分布については、必ずしも明確に把握している訳ではないが、以下明らかなものについて時代別に述べてみることにする（図3）。

(1) 旧石器時代

この地域は、関沢^{せきざわ}（14）、太子林^{たいしはやし}（15）など旧石器時代の遺跡が、飯山地方では最も多く分布することが認められているところである。特に昭和63年調査の日焼遺跡からは、この時代の良好な石器群が検出されている。

河岸段丘上に分布していることからしても千曲川との密接な関係をうかがい知ることができる。

なお、西の長峰丘陵上の大塚^{おおつか}（31）、尾崎南^{おさき}（38）もこの時代の遺跡である。

(2) 縄文時代

この時代における飯山地方初期の遺跡は、北竜湖遺跡で、上野遺跡東方約2.5km地点に所在し、草創期・早期に位置づけられる表裏縄文土器が出土している。

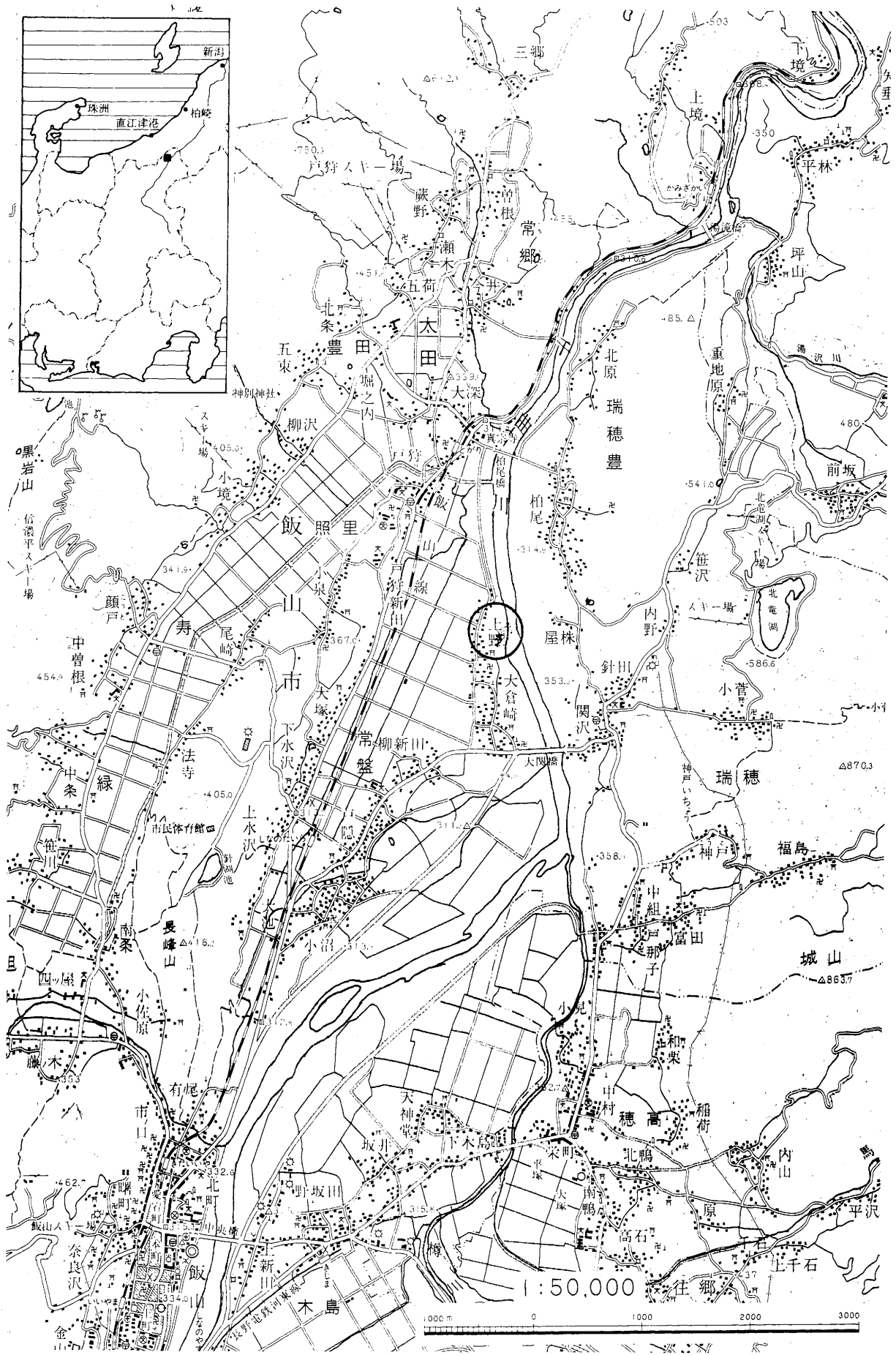


図3 上野遺跡位置図

前期の遺跡には、大倉崎(6)、太子林(15)、瀬付(7)、岡峰(24)などがあり、中期では、蓮華文などを特徴とする北陸系の土器片が採集されている上ノ原遺跡が挙げられる。

また、後期の遺跡として重要なのは、宮中遺跡で、昭和55年調査の際石棺墓23基が検出されている。なお、飯山盆地西縁の関田山地東麓には、中・晩期の柳沢A(41)、をはじめ晩期の遺跡が点在している。

(3) 弥生時代

この地方において、長峰丘陵上の諸遺跡(24~40)はこの時代の遺跡として著名である。特に小泉遺跡(35)からは、過去3回の発掘調査の際弥生中・後期の大集落跡や、中期の木棺墓群などが検出されている。

上野遺跡でも住居址や土器片なども出土しているとともに、照丘遺跡(27)からは中期の栗林式土器や木製品等が出土している。

(4) 古墳時代

現在、上野古墳(4)をはじめ、向峰古墳群(16)・長峰丘陵上の古墳群(27・28・32)が確認されている。上野遺跡では北陸系の土器を伴った前期の竪穴住居址と方形周溝墓が検出されている。

(5) 古代・中世(奈良時代以降)

飯山地方においては、奈良時代に比定できる遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡は屋株(17)、大倉崎II(5)などがあげられる。また、関田山地東麓に柳沢(44)をはじめ多くの遺跡が点在しているが、平安時代末から中世にかけては判然としない部分が多い。

ここ上野遺跡では、集落跡や墓址などが検出されている。

城館跡については、対岸の瑞穂地区と関田山地東麓に多く点在している。その中であって千曲川にのぞむ位置にある大倉崎館跡は注目される場所である。

参考文献

飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』

飯山市教育委員会 1990 『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書II』

飯山市・飯山市誌編纂委員会 1991 『飯山市誌自然環境編』

飯山市教育委員会 1994 『上野遺跡IV』

2 上野遺跡の概要と過去の調査

上野遺跡は、常盤平の東端部にあたり標高約322m、東西に約500m南北に約1,500mの上野丘陵上にあって、丘陵全体にその広がりを見せている。

千曲川左岸に接するこの丘陵東側は比高10~15mの段丘崖を有し、西側は緩やかに傾斜し常盤平(旧氾濫源)に接している。この緩斜面にある畑地の表面に遺物が散布していることや、丘頂に古墳のあることは、古くから知られており、また、丘陵北端部に雄大な濠を巡らした「お城跡」(大倉崎館跡)のあることも『村史ときわ』などに紹介されている。古墳は丘陵のほぼ中央で1基確認されている。なお、平成元(1989)年の発掘調査により、複合遺跡であることが確認された。

この遺跡は、市内の遺跡でも第一級と目されていたが、昭和63年から平成3年にかけての国道117号線(小沼・湯滝バイパス)建設工事によって、東西に分断されてしまったのである。

以下、調査年次を追いながら過去の調査について記す(図5)。

昭和63(1988)年 大倉崎館跡の発掘調査が実施され、幅10m以上深さ5m以上の雄大な空壕を有する鎌倉・室町時代(14・15世紀)の館であることを確認。出土遺物の中には輸入磁器の食器類、越前・珠洲焼の大甕、瀬戸・美濃系の香炉、風炉などや銭貨もあり、県内でも貴重な中世の館跡であることが判明し、中世史を解明する上で重要な資料が得られた。

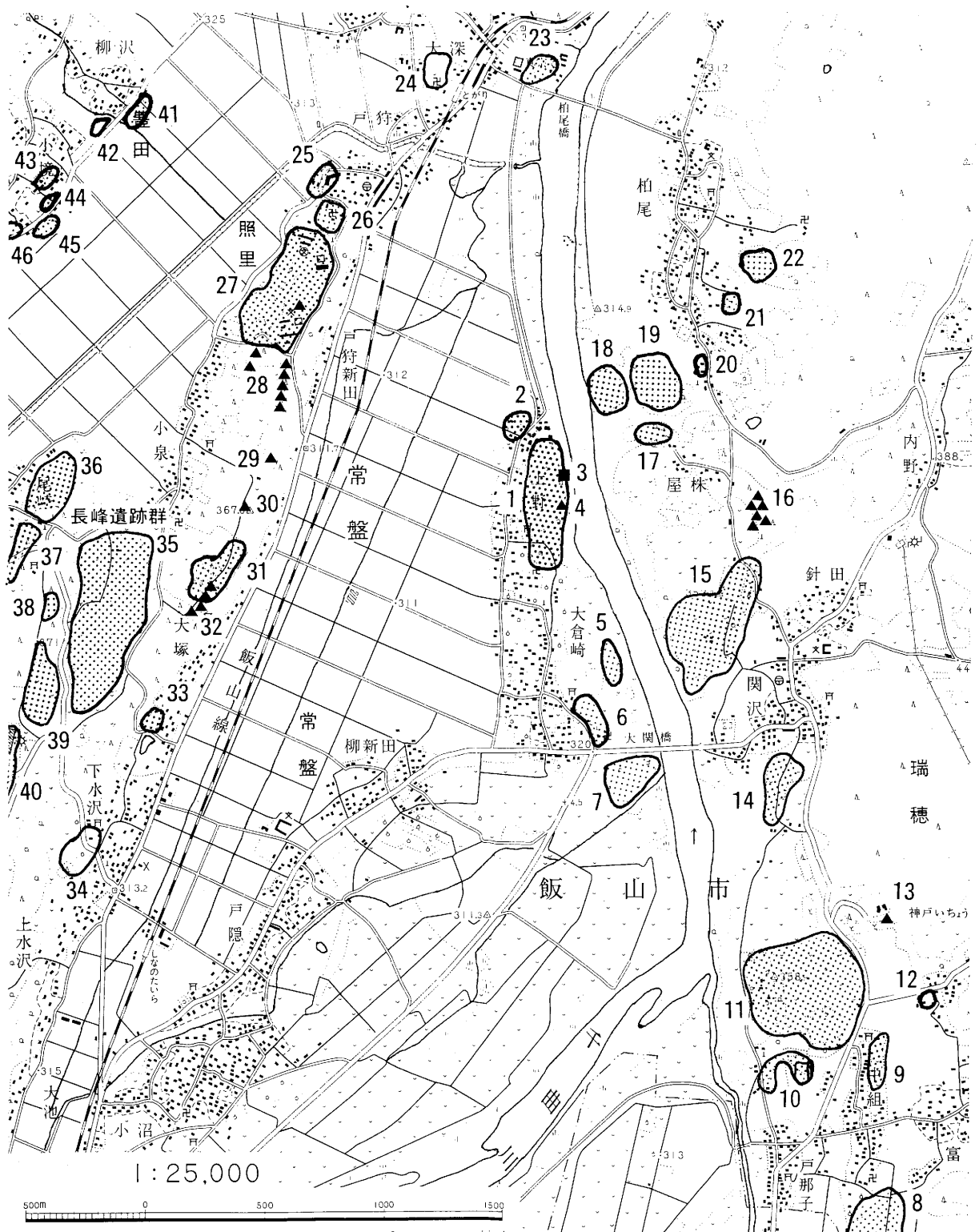


図4 周辺の遺跡分布図 (1:25,000)

- 1.上野 2.上野II 3.大倉崎館 4.上野古墳 5.大倉崎II 6.大倉崎 7.瀬附 8.尾崎 9.城の前 10.千苅・犬飼館 11.宮中 12.猿飼田 13.飯綱堂古墳 14.関沢 15.太子林 16.向峰古墳群 17.屋株 18.日焼 19.南原 20.堺ノ沢 21.柏尾南館 22.上ノ原 23.真宗寺 24.岡峰 25.旧照里小学校 26.光明寺前 27.照丘 28.照里古墳群 29.30.茶白山古墳 31.大塚 32.大塚古墳群 33.水沢 34.下水沢 35.小泉 36.柳町 37.山崎 38.尾崎南 39.東長峰 40.西長峰 41.柳沢A 42.柳沢B 43.鶴屋敷 44.桜沢 45.小境 46.押出

平成元(1989)年 国道117号線バイパス路線約500m間の発掘調査を行ない、全面から旧石器から平安までの各時代にわたる遺構・遺物が検出され、複合遺跡であることが確認された。

〈遺構・遺物の検出概要〉

旧石器時代 石器集中地点5箇所・玉髄製品など。

縄文時代 溝状土坑、深鉢形土器など。

弥生時代 中・後期の竪穴式住居址、木棺墓群、掘立柱建物、甕・壺など。

古墳時代 前期の竪穴式住居址・方形周溝墓(北陸色の極めて強い土器を伴っていた)ほか。

平安時代 住居址、土坑墓、鍛冶遺物など。

平成2(1990)年 この丘陵のほぼ中央を東西に横断する市道7-335号線の拡幅改良に伴う調査がなされ、旧石器時代のナイフ形石器、石核、弥生時代の掘立柱建物や弥生式土器、平安時代の竪穴式住居・土師器などが検出された。

平成4(1992)年 戸狩工業団地への取付道路として、市道7-334号線の拡幅改良工事並びに国道117号線バイパス拡幅工事のための発掘調査が実施された。ここにおいても旧石器・縄文・弥生・平安各時代の遺構・遺物が検出されている。

平成5(1993)年 国道117号線環境整備事業(チェーン着脱場建設)に伴う調査を行い、旧石器時代の礫群、弥生時代の木棺墓群、平安時代の竪穴住居址や桁行をそろえて並ぶ大型掘立柱建物址などが検出された。

以上5回の緊急発掘調査がなされ、更に本報告書分を併せて6回の発掘調査が行なわれている。

発掘調査した延べ面積は、約12,700㎡となり、上野遺跡約240,000㎡の約5%となる。

これまでに検出された主な遺構・遺物

旧石器時代 礫群9 石器群9 ナイフ形石器 尖頭器 他

縄文時代 溝状土坑49 早・前・中・後・晩期土器・石器

弥生時代 中期 竪穴住居址7 掘立柱建物址10

後期 竪穴住居址3 木棺墓63 土坑墓9 土器・石器 勾玉・管玉

古墳時代 前期竪穴住居址1 掘立柱建物址1 方形周溝墓5 北陸系土器

平安時代 竪穴住居址34 掘立柱建物址9 土坑墓5 木棺墓2 溝1

土器・陶器・鉄製品・ふいご羽口・鉄滓・土錘 他

中世 館跡1 輸入磁器・国産陶器・瓦質風炉・石臼・銭貨 他

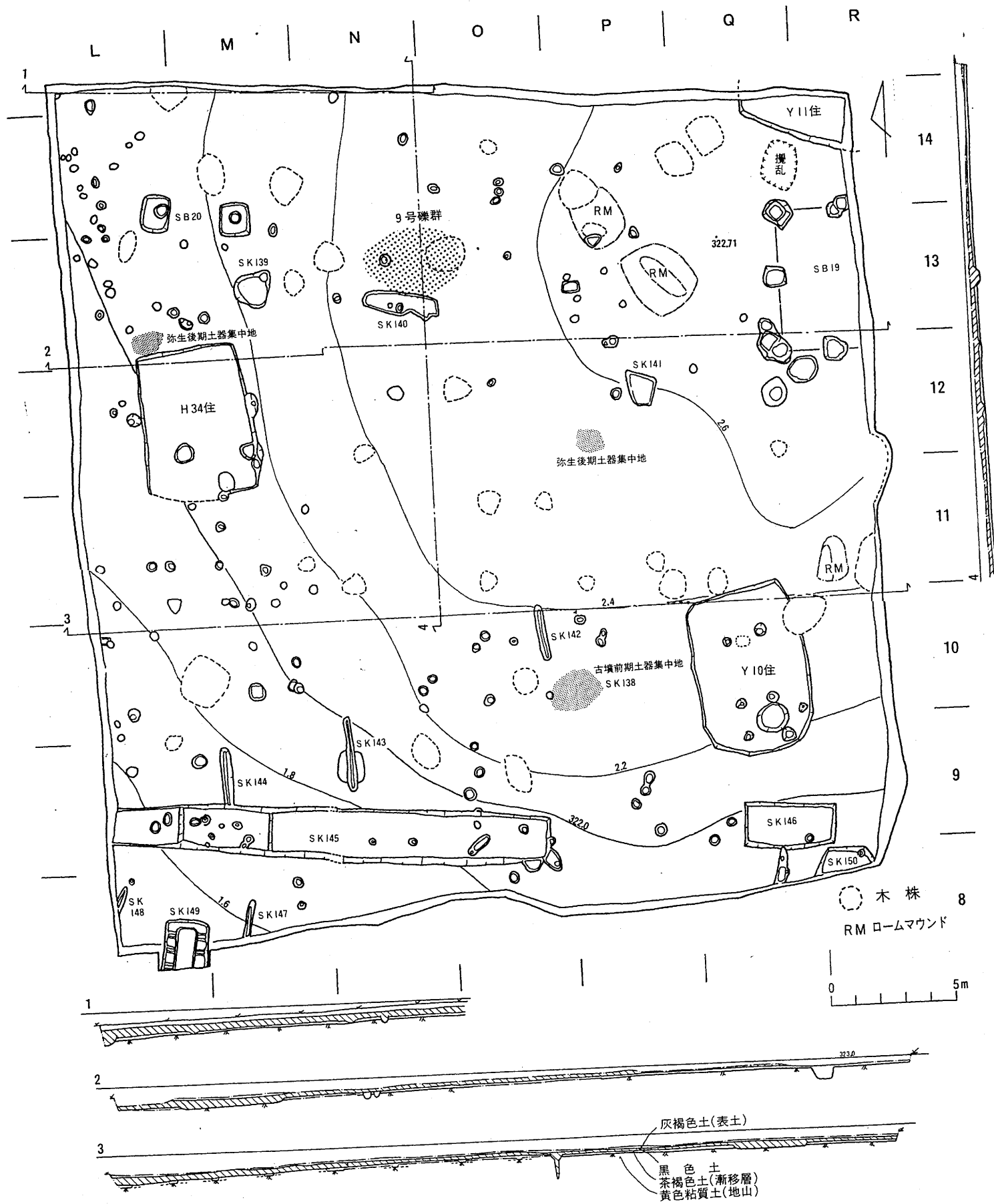
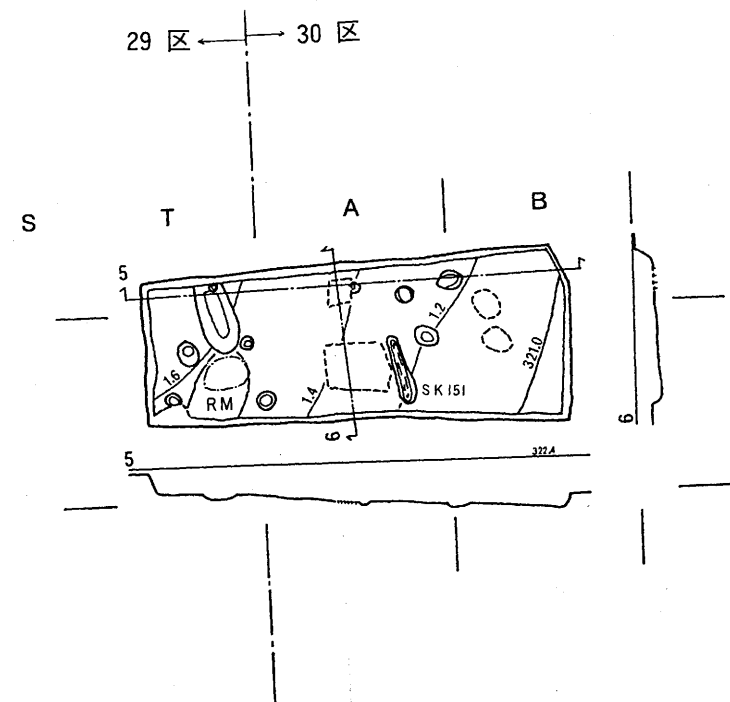


図6 遺構全体図 1:200



第3章 旧石器時代

1 遺物の出土状態

A 出土層位と分布

本調査地区における基本層序については第1章に掲載してある(図2)。旧石器石器群が出土した層位は、第IV層上部から第III層漸移層にかけてであり、一部はII層黒色土まで浮いていた。過去の調査による上野遺跡のテフラ層の調査では、第IV層のソフト化したテフラ層の下位に層厚約20cmの褐色風化テフラ層が存在し、その下限に始良Tn火山灰(AT)が認められている。したがって、今回の調査によって出土した旧石器群もAT層よりかなり上位の出土層準ということが出来る。

旧石器石器群は弥生時代、平安時代等の遺構によって破壊された状況で散在的に出土している。このうち、礫と共に石器がまとまって出土した地点が1か所認められた。この地点を、従来からの通し番号を踏襲して9号礫群と呼称する事とする。なお、調査時には石器群としてとらえて、通し番号である第10号石器群としていた(石器の注記にもUN29プレ10とした)。

その他の出土地点は、後世の遺構によって原位置を離れて出土したものである。

B 地点分布

9号礫群(図8) N・O-12区を中心にまとまって出土したもので、約20点の礫と46点の石器で構成されている。規模は、径約250cmの範囲に分布する。ただし、O-12区に切り株があり、これを除去することができなかったが、分布状況からすればこの切り株の地点にもまとまって分布していたものと考えられる。とすれば、もう少し規模は大きかったものと思われる。礫は二か所においてまとまりがみられる。ほとんどが焼礫で破損しているが、付近で接合する礫もある。レベルでは比較的高い位置で出土しているが、これは切り株の根によって持ち上げられた可能性がある。なお、南側にはなれて石核のそばに1点の礫があるが、これは他の礫と石質が相違する。砂岩系統の石で断面三角形を呈し、頭部が破損している。図示できなかったがハンマーとして使用されたものと考えられる。

石器は、明確な二次加工を施した石器は1点のみである。原石から加工手順のわかる接合資料も存在するものの、多くは断片的な剥片である。

2 出土遺物

今回の調査によって出土した旧石器時代の遺物は総数約60点である。9号礫群以外の地点では、弥生・平安時代の遺構によって包含層が破壊されているため、散在的に出土したものである。以下に、9号礫群出土石器と各地区出土遺物に分けて説明を加える。

A 9号礫群出土石器(図9・10)

1~6はチャー下製の石核を含む同一母岩である。接合するとちょうど拳大の大きさとなる。1は打面作出剥片で、このブランクでは最も早く作出されたものである。加撃打面を用意して約90度の角度で横長の剥片を作出している。

2は残核である。当初の大きさから約半分の長さとなっている。目的剥片は、図示した4・5を含め

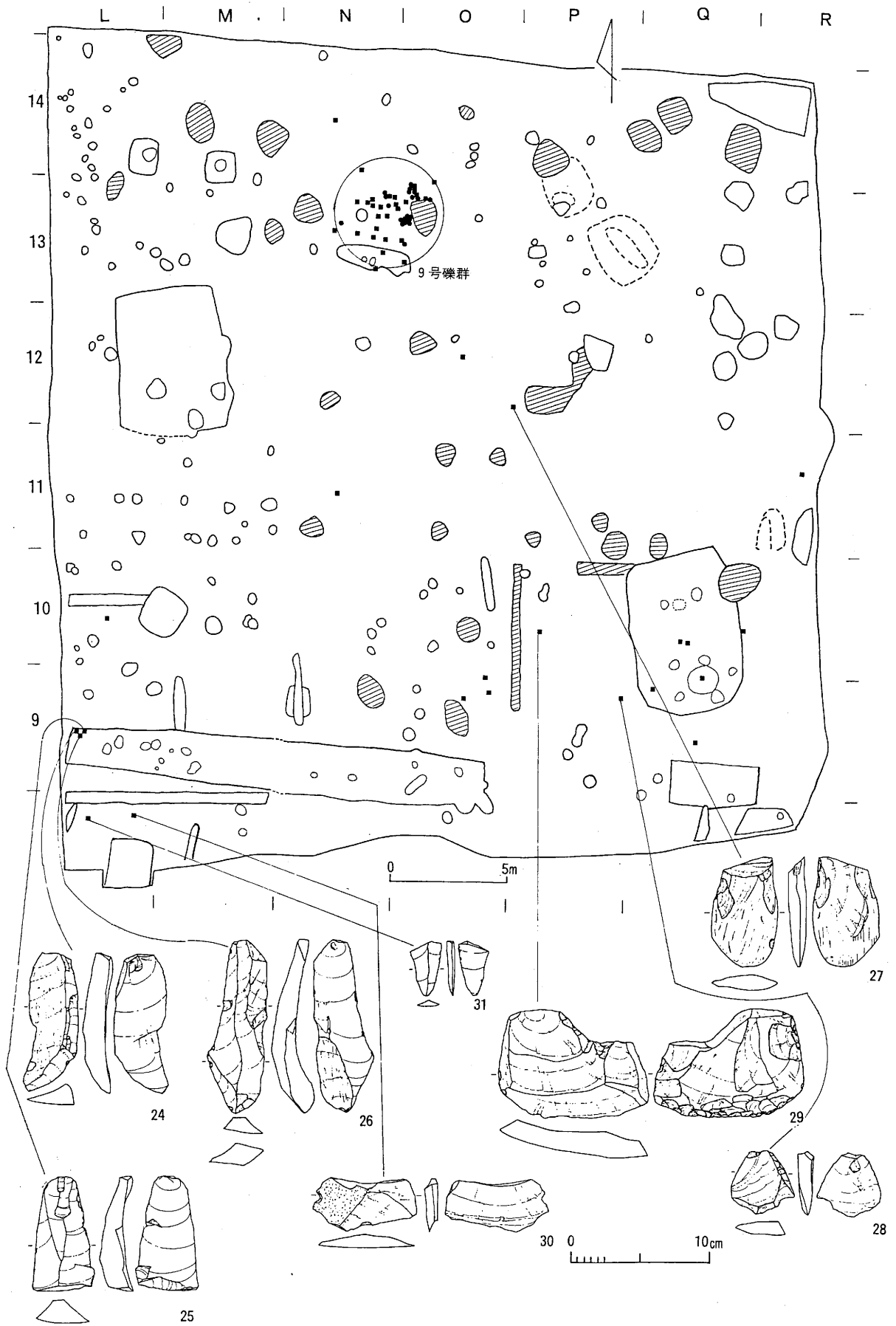


图7 旧石器时代遗物分布图

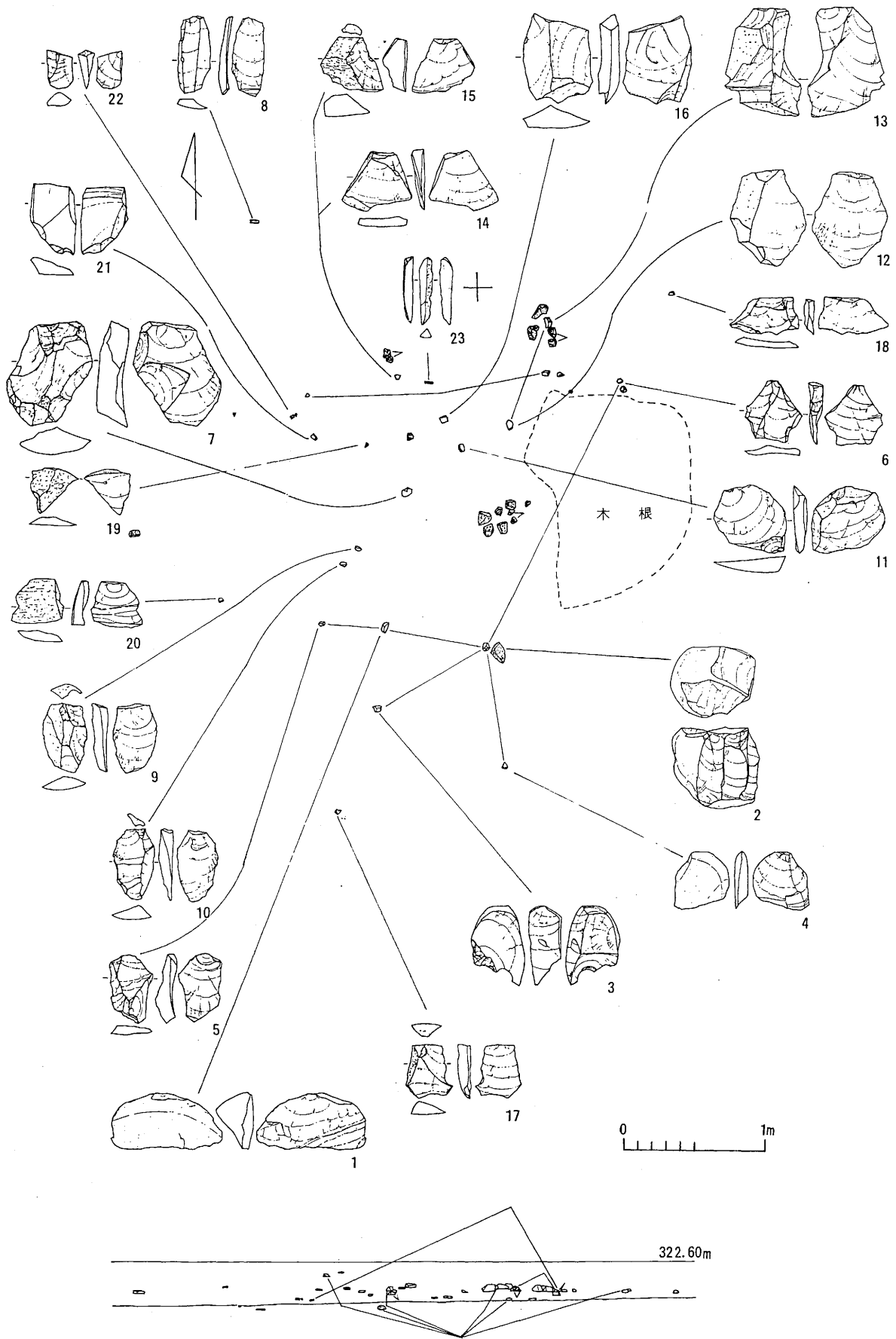


图8 9号磔群石器·磔分布图 (1:40)

て4点のみと考えられ、検出しなかったこの残核の最後の二枚についても、その剥片には表皮が残っていることが伺える。形態は典型的な石刃石核である。なお、打面には1を作出した面のほかにもう一か所の打面作出面が認められる。これは、3～5の剥片を作出した以降、6の剥片を作出する前に行ったものである。

3・4は、1の剥片を剥いだあと4は下端からの加撃で、3は上部からそれぞれ作出している。順序は4→3である。

5・6は目的剥片である。6の側面図の二次加工は、石核打面調整痕である。

7は搔器ないし削器で、安山岩製である。分厚い縦長剥片を用い、やや先端が尖る形態を呈する。刃部と思われる左下端部には、階段状の剥離がわずかな範囲に加えられる。また、裏面側には厚さを調整するためか、右側縁より加撃されている。

8～9は刃器状剥片で、いずれも安山岩である。打面調整もすべてなされている。

11は石核調整剥片であろうか。12・13は接合した剥片である。14～23も剥片であるが、16は槌状の剥離が認められ、あるいは彫器であるのかもしれない。安山岩で、風化が進んでいる。その他の石器もすべて安山岩である。黒曜石は1点のみチップが出土している。

また、地点分布の項でも触れたが、2の石核に接してハンマーと考えられる石器も出土している。

以上9号礫群出土石器について触れてきた。全体的に調整剥片と若干の目的剥片が出土している。また、接合資料もあり、本地点に母岩が持ち込まれ石器製作が行われ、遺棄されたことが明らかとなったものの、製品と認められる石器がほとんどなく、時間的位置についてもいまひとつ明確ではない。

B その他の地点出土石器 (図11) 2郡

L-9区出土石器 (24~25) SK145の壁面からの出土で3点がまとまって出土している。いずれも頁岩製の大型品であるが、明確な二次加工は認められない。1は両設打面をもつ石核から作出されたものである。正面側には、節理面のような剥落面が大きくある。26は湾曲した大型剥片で、裏面には24と同様に剥若面がある。色調からは同一母岩と思われる。3は、破損品であるがやはり大型の剥片である。縁辺に小剥離痕が認められる。

O-12区出土石器 (27) 27は刃部磨製石斧である。ナイフ形石器の隆盛時期に特徴的な蛇紋岩製の石斧と相違し、粘板岩系統の石材を用いている。頭部を欠くが、ほぼ扁平で刃部が丸い形態を呈している。刃部を中心によく磨かれている。

P-9区出土石器 (28) 28は安山岩製の剥片である。打面調整剥片であろうか。

P-10区出土石器 (29) 29は削器である。大型の横長の剥片を用いている。刃部は主に裏面側から細かな二次加工を施して幅広い刃部を形成している。このような形態は旧石器にはみられないものである。

L-8区出土石器 (30・31) 30・31は剥片で、30は安山岩製、31は頁岩製である。

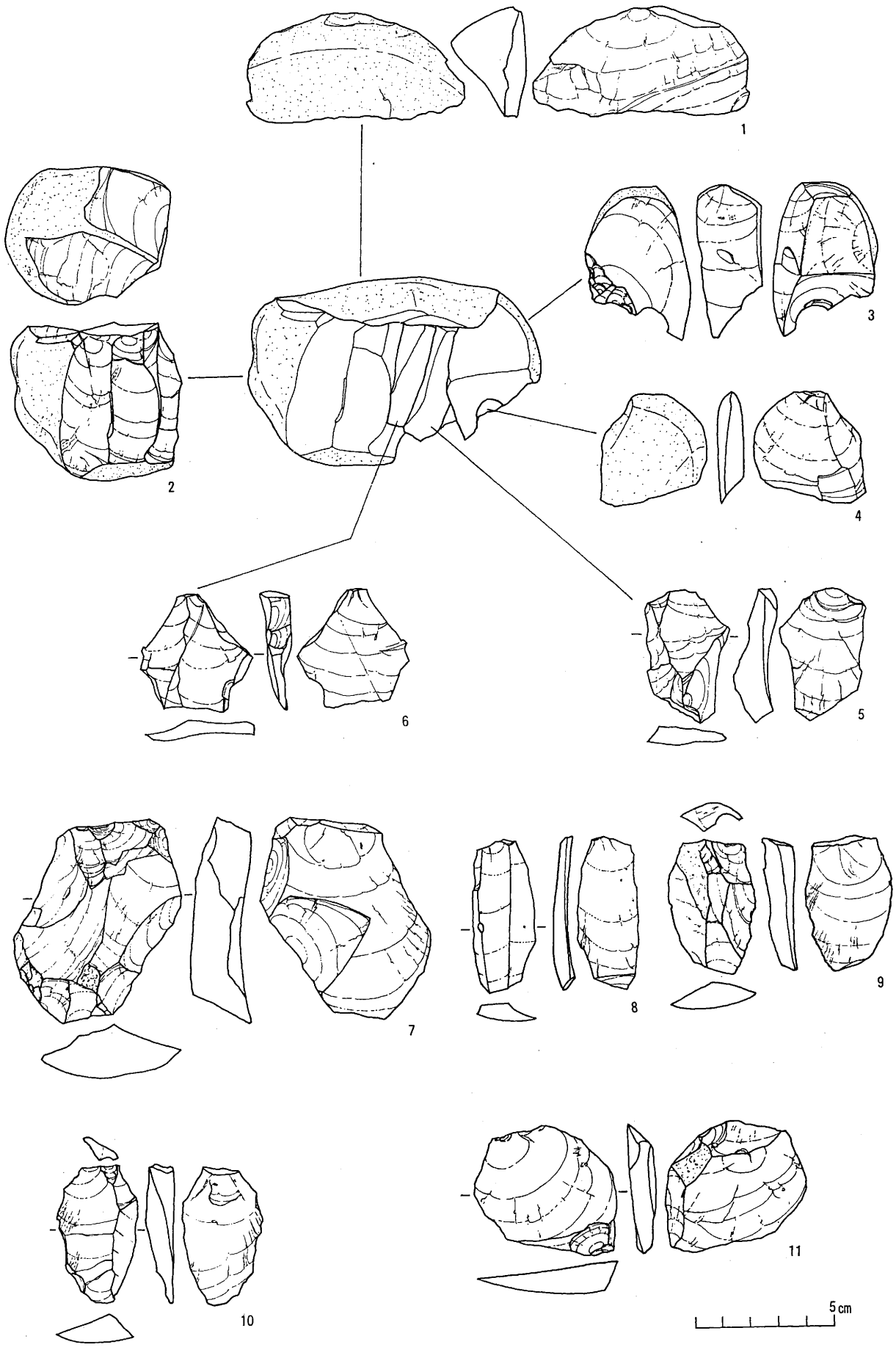


图9 旧石器实测图(1) (1:2)

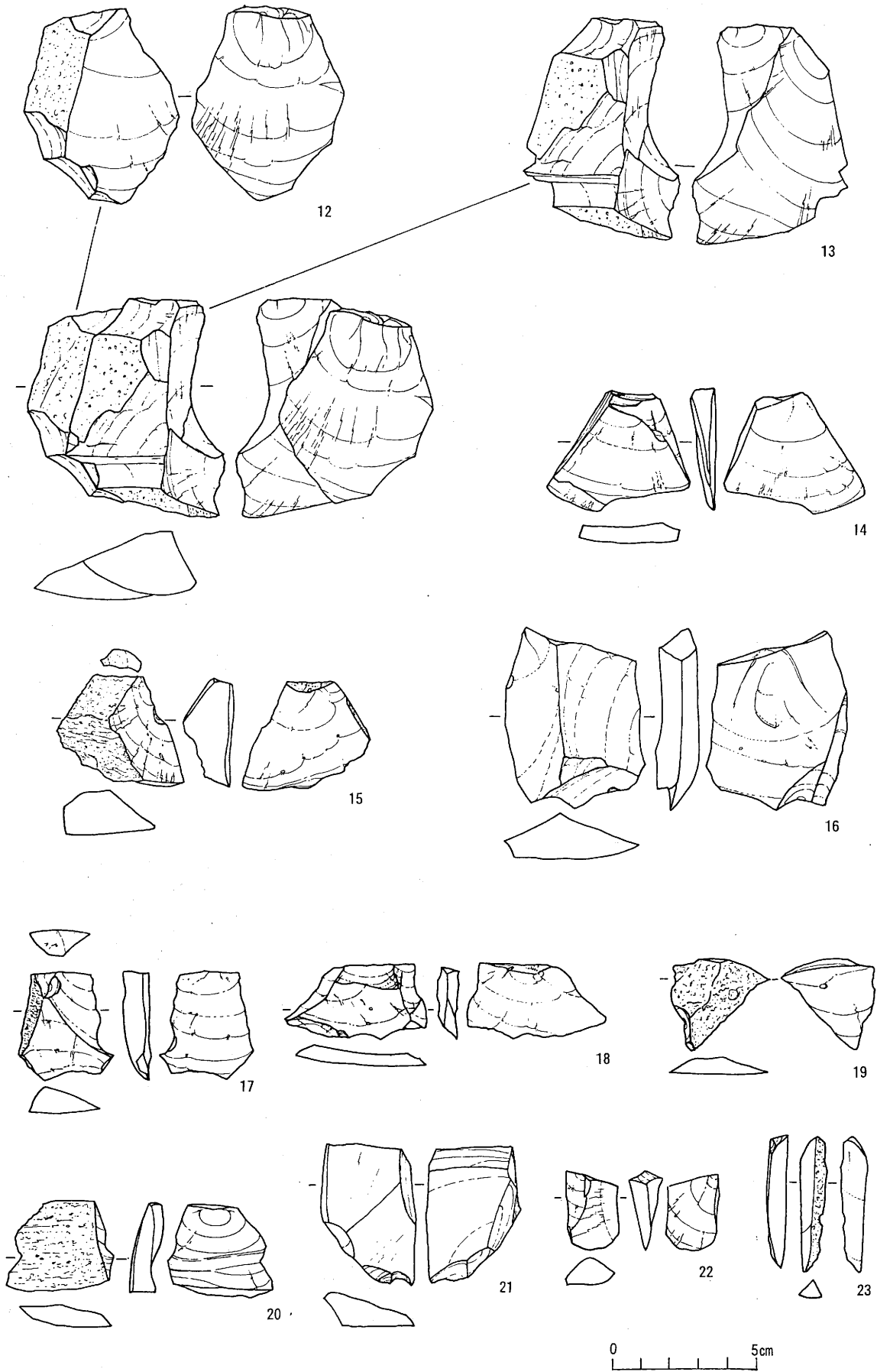
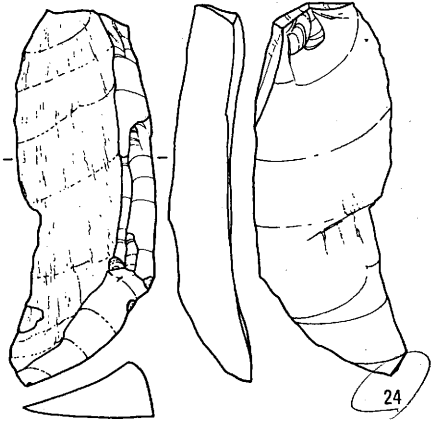


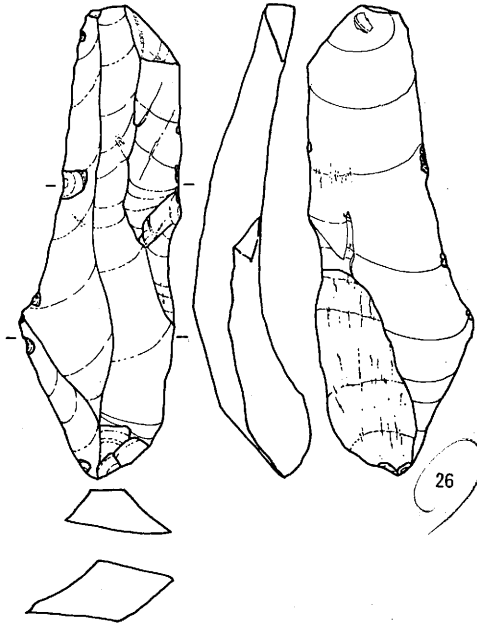
图10 旧石器实测图(2) (1:2)

~D = 54E 子 1/8
石

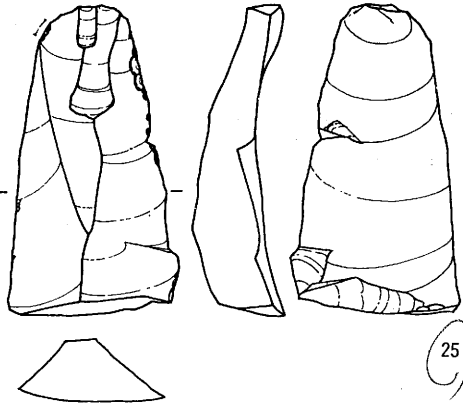
L-9区



24

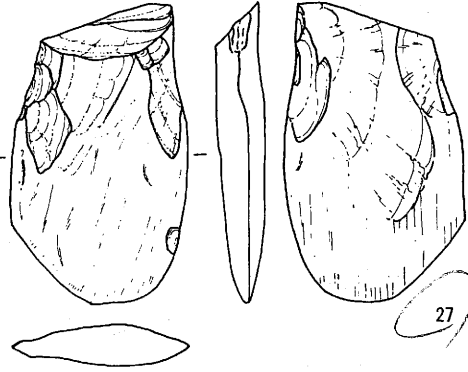


26



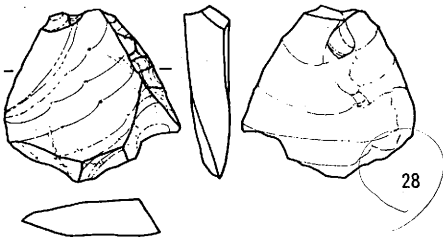
25

O-12区



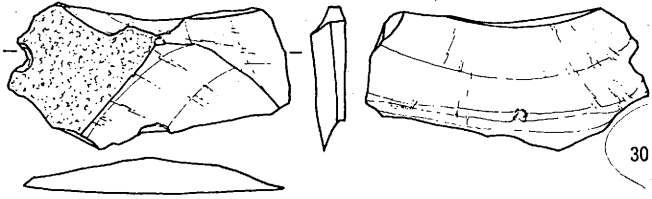
27

P-9区



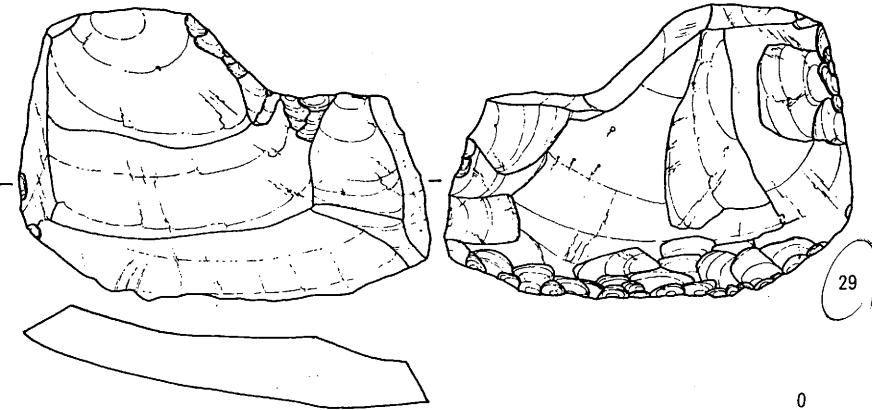
28

L-8区

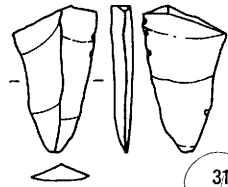


30

P-10区



29



31

0 5cm

图11 旧石器实测图(3) (1:2)

3 9号礫群の母岩別資料について

9号礫群より出土した石器の接合関係および母岩別に識別する作業を行った。資料的に少なく、十分な検討を加えることはできないが、以下に説明する(図12)。

第1母岩別資料 6点の資料がすべて接合したもので、残核を含み一つの石核となったものである。礫群内では南側に位置し、残核とハンマーが接している。1点の目的剥片のみ2m以上離れているが、他は近接している。ハンマーと残核の出土位置付近が作業を行った場所と考えてよいだろう。なお、この母岩の最終の2枚の剥片が検出されなかった。他地点への移動も考えられる。

第2母岩別資料 2点の接合資料および2点、接合しないが同一母岩と思われる石器2点の計4点がある。中央の礫群の北側に分布するが、散在的な分布である。

第3母岩別資料 2点の接合しない石器資料である。石器群の端部から出土している。いずれも初期の石核調整剥片であろう。

第4母岩別資料 石器群のほぼ中央から出土した2点の石器で、接合はしない。いずれも利器として考えられるものであり、製品として他地点より搬入されたと思われる。

第5母岩別資料 2点の石器で接合しない。風化の進んだ資料であるが、あるいは製品としてよいのかもしれない。

以上、簡単に母岩別資料について説明を加えてきた。9号礫群については全体を発掘したとはいえないが、おおよその性格について触れておきたい。

礫群は二か所で集中的な分布が認められる。しかしその数も5～8点であって、一般に呼ばれる礫群の数からすれば少ないといえる。これは切り株が付近にあることも影響しているものと思われる。ただし、大きく移動したものではないだろう。また、石器については、まとまりの中でかなりの距離をもって同一母岩が分布していることからすれば、むしろひとつのまとまりとしてとらえることを支持しているように思われる。現象的な考えではあるが、この群は5点以上の母岩の異なる石材が持ち込まれ、第1～3母岩別資料の石器製作が行なわれた。そして第2・3母岩別資料の石核は他地点へ搬出された。第4・5母岩別資料は製品として本群に搬入されたのかもしれない。

9号礫群のまとまりを一世帯としての単位であると考えておきたい。

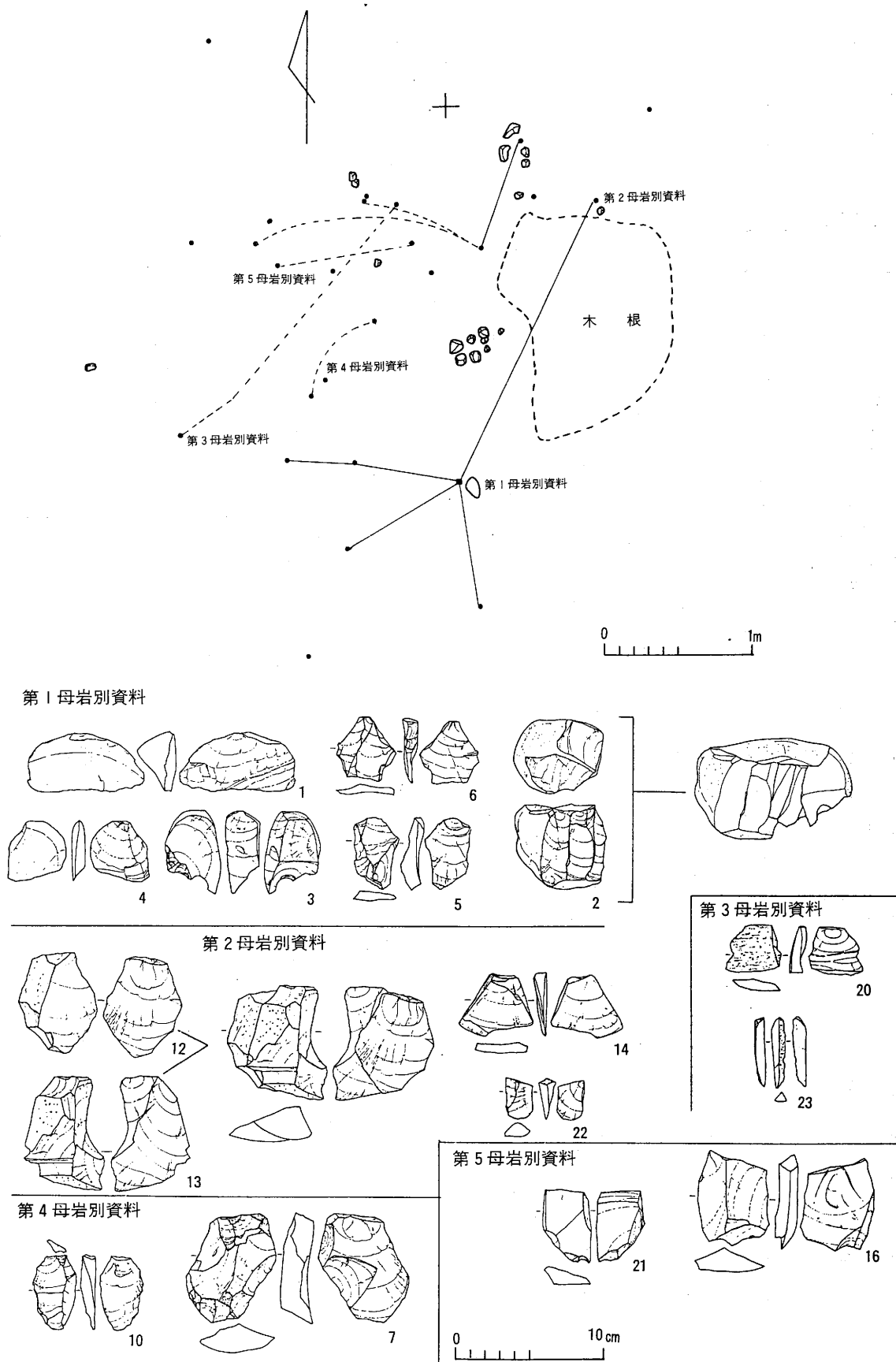


図12 母岩別資料分布図及び石器集成 (1:40、1:4)

表1 旧石器計測表

図版 番号	器 種 名	計 測 値				石器個体番号	石質・備考
		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g		
1	剥片	40	79	27	76.1	94UNプレ10-41	チャート
2	残核	57	61	50	209.6	94UNプレ10-39	チャート
3	剥片	55	39	23	54.8	94UNプレ10-44	チャート
4	剥片	41	39	10	19.6	94UNプレ10-45	チャート
5	剥片	48	30	13	15.5	94UNプレ10-42	チャート
6	剥片	41	40	11	13.2	94UNプレ10-19	チャート
7	搔器	73	51	21	76.0	94UNプレ10-14	安山岩
8	剥片	55	23	8	7.7	94UNプレ10-1	安山岩
9	剥片	49	32	12	13.6	94UNプレ10-15	安山岩
10	剥片	50	30	10	11.5	94UNプレ10-16	安山岩
11	剥片	47	52	11	26.9	94UNプレ10-13	安山岩
12	剥片	67	54	14	42.1	94UNプレ10-30	安山岩
13	剥片	77	55	25	67.6	94UNプレ10-22	安山岩
14	剥片	42	50	9	13.2	94UNプレ10-8	安山岩
15	剥片	31	34	7	5.3	94UNプレ10-11	安山岩
16	剥片	63	49	11	46.7	94UNプレ10-10	安山岩
17	剥片	37	34	10	10.1	94UNプレ10-46	安山岩
18	剥片	26	49	6	8.5	94UNプレ10-18	安山岩
19	剥片	38	44	17	22.1	94UNプレ10-28	安山岩
20	剥片	31	32	11	11.4	94UNプレ10-43	安山岩
21	剥片	48	33	12	33.8	94UNプレ10-5	安山岩
22	剥片	27	18	13	3.6	94UNプレ10-4	安山岩
23	剥片	47	10	8	2.4	94UNプレ10-9	安山岩
24	剥片	100	38	22	52.0	94UNL-9-3	頁岩
25	剥片	82	46	25	56.1	94UNL-9-1	頁岩
26	剥片	125	42	71	84.3	94UNL-9-2	頁岩・破損
27	刃部磨製石斧	80	47	11	53.0	94UNO-12-1	粘板岩・破損
28	剥片	45	47	12	21.4	94UNP-9-2	安山岩
29	削器	77	108	28	206.1	94UNP-10-8	安山岩
30	剥片	39	76	12	30.4	94UNL-8-2	安山岩
31	剥片	39	23	6	3.2	94UNL-8-1	頁岩・破損

第4章 縄文時代

1 遺構 (図13)

縄文時代の遺構に「T」ピットなどと呼称される溝状土坑が6基ある。これらは主軸を並行して弧状に並んでいる。いずれも出土遺物はない。

SK142 29O-10区にある。223cm×38cm。深さ100cm。底は両端がやや深い。

SK143 29N-9区にある。306cm×36cm。深さ106cm。南端がより深い。南半分は浅い楕円形の掘り込みがある。

SK144 29M-9区にある。SK145に切られる。278cm×38cm。深さ114cm。南端がより深い。上部は2段に掘り込まれている。

SK147 29M-8区にあり、南部は調査地外。135cm以上×36cm。深さ106cm。

SK148 29L-8区にあり、西南部は調査地外。114cm以上×24cm。深さ90cm。

SK151 30A-9区にある。この位置は千曲川の崖の上端に約5mの所である。180cm×40cm、深さ105cmで、上野遺跡検出例では短い部類に入る。上部は2段に掘り込まれている。

2 遺物 (図14)

早期・前期・後期の土器が調査地内より散在的に出土している。出土総量はコンテナ1箱に満たず、

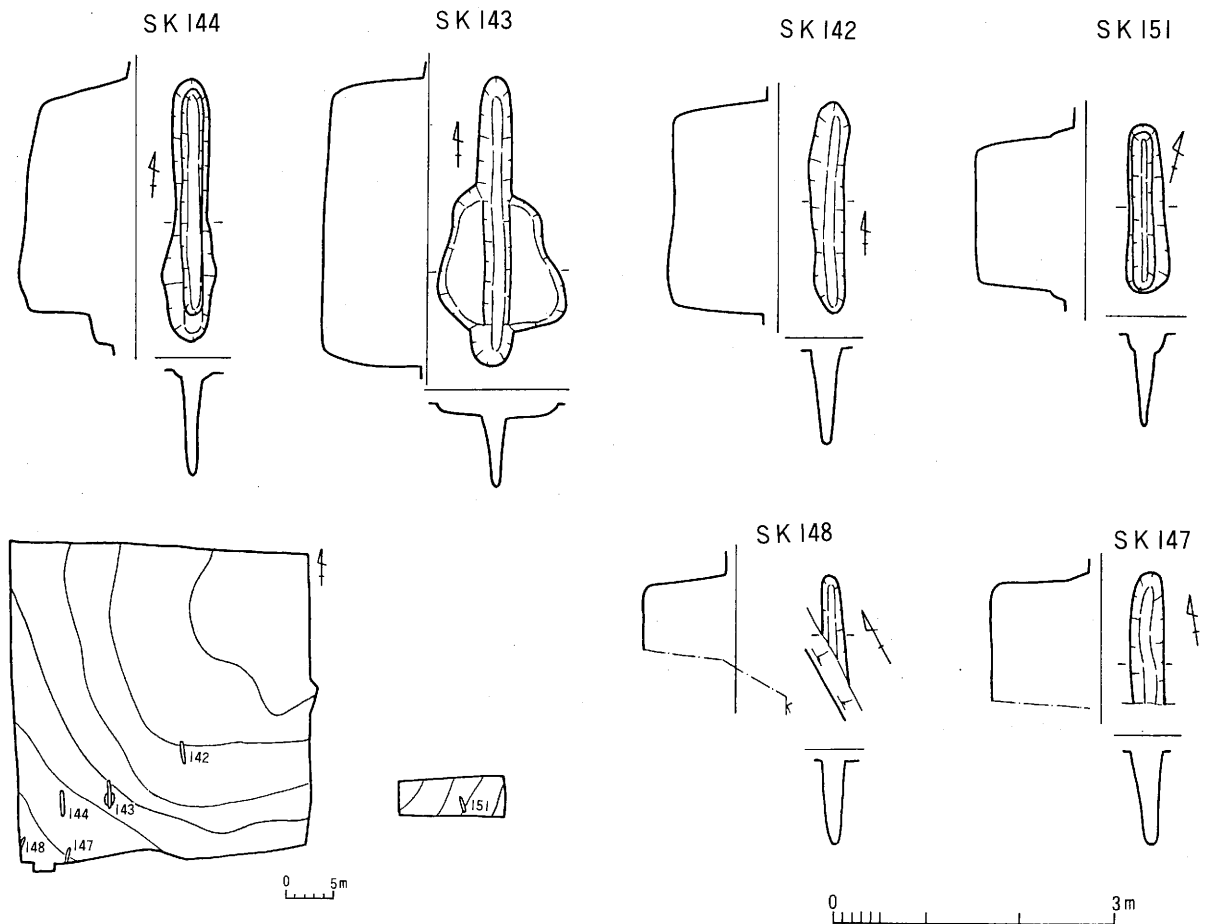


図13 縄文時代の遺構 1:80

総重量1.4kgである。

早期の土器（1～4）

押型文土器が2点ある。1は楕円押型文で、6×5mmの楕円文を水平に押圧している。色調は黄褐色。29Q-10区出土。2は山形押型文である。横位回転でやや右上がりに施文されている。色調は茶褐色。29R-Q区出土。

3・4は同一個体と思われる。3は絡条体圧痕文を施した口縁部片である。口縁端部は絡条体の押圧で鋸歯状となる。外面は強い押圧で凹凸がはげしい。内面はナデ調整。4は胴部片で羽状縄文が施される。3・4とも胎土に繊維を多量に含む。焼成は良好、赤褐色を呈する。29Q-11区出土。早期末葉～前期初頭に置かれよう。

前期の土器（5～20）

5～7は羽状縄文土器で同一個体。口縁は水平。胎土に繊維を含む。焼成は良好で堅緻。色調は黄褐色。内面はヘラミガキ状の調整がていねいに施されている。29M-8区出土。

8・9は胎土に繊維を含まない羽状縄文土器である。細砂を多く含むが焼成は良好。黄褐色を呈する。8は29N-14、9は29Q-14区出土。

10は雲母を含む細砂を多量に含み表面がざらざらする羽状縄文土器である。焼成は良好。暗茶褐色を呈する。29L-10区出土。

11は細い縄文を粗に施文している。内面はハケ状の調整がていねいに施されている。焼成は良く、暗灰色を呈する。胎土に砂粒を多量に含む。29O-11区出土。

以上の縄文土器のうち繊維を含むものについては前期前半に、その他については後半におかれよう。

12～16は半截竹管による結節浮線文をもつものである。12・14は縄文を地文とし、15は半截竹管による沈線文を地文としている。12は口縁部が内側に折り返される。いずれも内面の調整はていねいで、胎土に砂粒を含む。色調は黄褐色系。12が29P-11、13が29N-11、14が29P-12、15が29M-12、16が29M-12区出土。

17はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部近くの破片で、縄文を地文とし、半截竹管による山形文を施している。焼成良好で、黄褐色を呈する。29N-19区出土。

18・19はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部片で、半截竹管による条線文が施されている。18は口縁端に半截竹管の刺突文をめぐらせ、その下に同様の刺突を加えた円形浮文を呈し、焼成良好、29M-11区出土。19は頸部片で、胎土・焼成・色調とも18とよく似ている。29N-10区出土。

20は半截竹管による条線文をもつ底部近くの胴部片である。胎土に砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。29L-9区出土。

これらの一群は前期後半の諸磯式併行期におかれよう。

後期の土器（21）

21は胴部上位に一条の沈線をめぐらす浅鉢である。内外面ともにハケ状の調整がなされ小石粒の移動痕が目立つ。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。灰褐色を呈する。29N-13区出土。後期から晩期にかけての無文系粗製浅鉢と考えている。

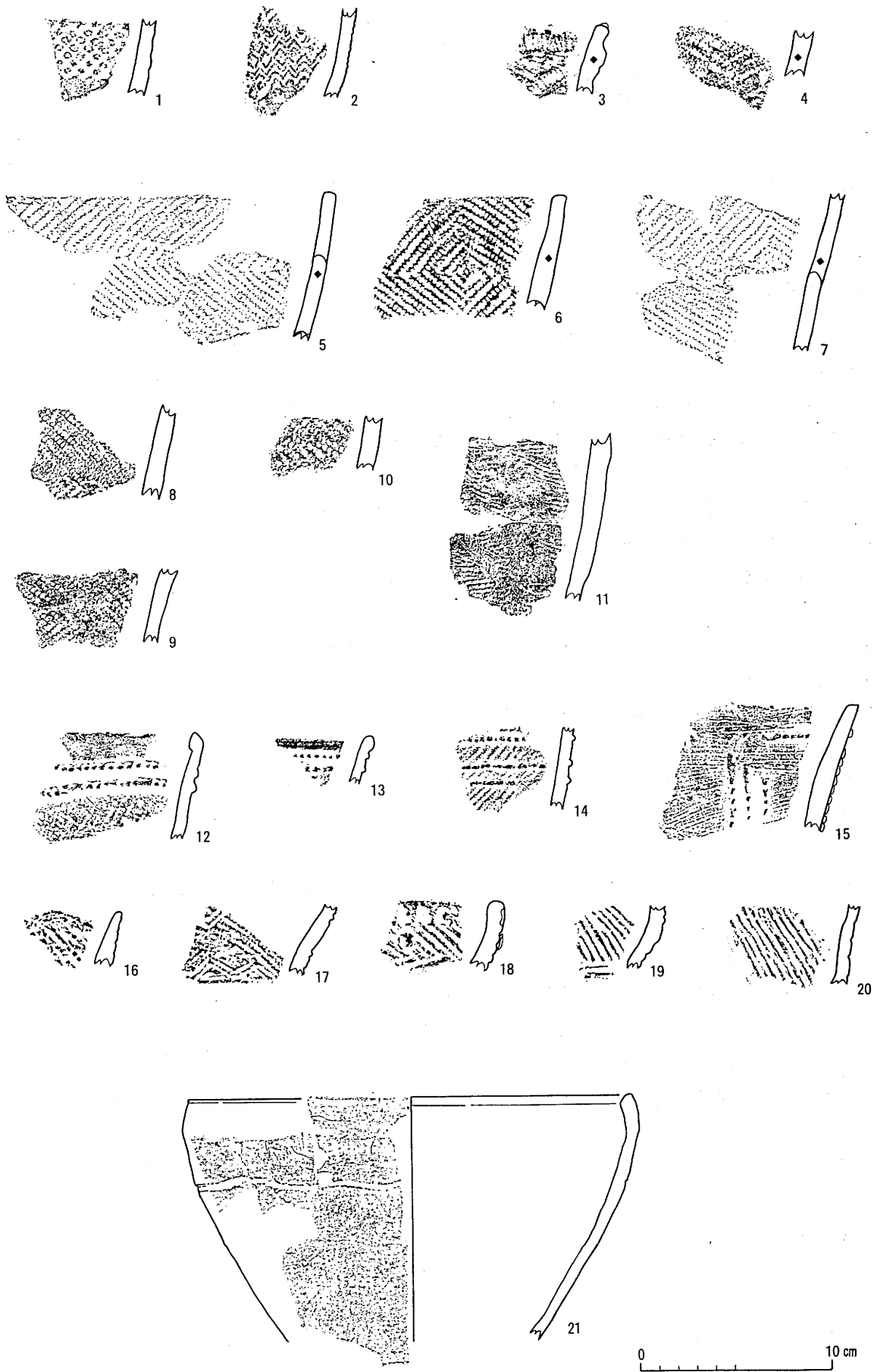


図14 縄文時代の土器 1:3 断面の四角は繊維土器を示す

第5章 弥生時代

1 遺 構

弥生時代の遺構に竪穴住居址と土坑がある。

A 竪穴住居址 (図15)

後期の竪穴住居址が調査地東部の丘陵最高所にあたる所から検出されている。

Y10号住居址

29Q-9~11区にある。基本的なプランは小判形だが、北辺は直線的である。南北棟で、長軸6.5m×短軸4.5mを測る。深さは確認面から約10cmと浅い。土層観察でも黒色土中から掘り込まれているが、深さは16cm程である。

床面は堅く締っており、南にやや傾斜する。主柱穴はP1~P4の4本で、柱間寸法は南北が約2.1m、東西が約1.25m。深さは床面から40~60cm。P1とP2の間に焼床があり、炉と考えられる。したがって入口は南に推定されるが、入口にあたる柱穴と推定できるものはない。P5は貯蔵穴と考えられる直径1.2m、深さ0.6mを測るピットである。

出土遺物は小片が少量あるのみで、図示しえたものは2点にすぎない。

Y11号住居址

調査地東北隅で住居址の南西隅が確認されている。掘り込み面は黒色土中で、深さは約45cmとY10号住居址に比べ深い。床は水平で堅く締っている。主柱穴は検出していない。

出土遺物は赤彩壺の口頸部が約 $\frac{1}{2}$ 周分あるほか小片がごくわずかである。

B 土 坑

個々に図示していないが弥生時代に比定される土坑が3基と、土器集中地点2か所がある。

SK139 (PL4)

29M-13区にある。1.5m×1.2mの楕円形プランで船底状に掘り込まれている土坑である。深さ50cm。全形の $\frac{1}{2}$ 程に復元できた甑こしきの破片が埋土中位から散在的に出土している。

SK140 (PL4)

29N-13区にある。2.8m×0.8mの長楕円形プランで、レンズ状に浅く掘り込まれている。深さは約20cm。弥生土器の小片が少量出土している。

SK141 (PL4)

29P-12区にある。1.2m×1.0mの不整形プランで、深さ50cm。柱穴と重複している。弥生土器の小片が少量出土している。

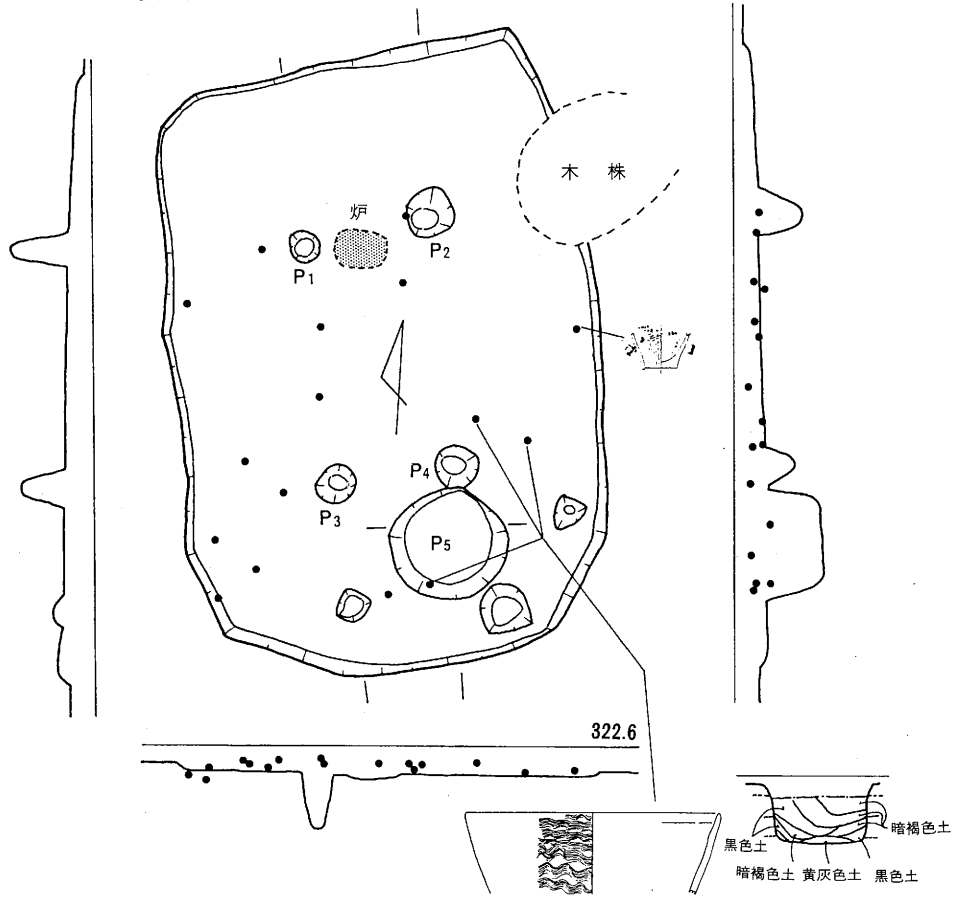
土器集中地点

黒色土層内の遺物量が少ない今回調査地にあって、同層中に弥生土器が集中していた地点が2か所検出されている。

1か所は29L-13区にあり、1m×0.8mの範囲に後期赤彩壺上半分が破片で水平に散在していた(PL5)。出土レベルは322.25mで黒色土中位である。

もう1か所は29P-12区にあり、1.2m×0.6mの範囲に後期波状文甕約1個体分の破片が水平に散在し

Y10号住居址



Y11号住居址

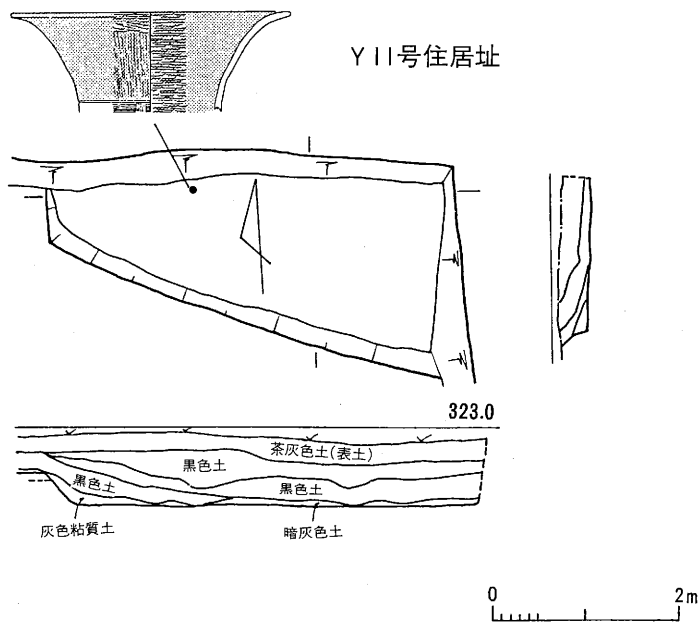


図15 弥生時代の竪穴住居址 1:80

ていた(PL5)。出土レベルは322.70mで、やはり黒色土中位である。

2 遺物

A 土器 (図16)

弥生時代後期の土器が竪穴住居址・土坑および黒色土中から出土している。

また古墳時代初頭の土器が1点あるがここで説明する。

(1) Y10号住居址出土土器 (1・2)

1は大型の甕の口縁部片である。外面に不連続な櫛描波状文(以下波状文と略す)を施す。口縁部はやや内湾する。内面の調整はヘラミガキと思われる。胎土に砂粒を多く含む。淡褐色を呈する。外面に煤が付着している。

2は赤彩の小型壺で、外面ヘラミガキののち赤彩されている。内面はナデ。胎土に砂をあまり含まない。淡褐色を呈する。

(2) Y11号住居址出土土器 (3)

3は赤彩の壺の口頸部で、約 $\frac{1}{2}$ 周が残っている。口径30cm。口縁部は外反する。内外面ともにヘラミガキののち赤彩。頸部外面には櫛描平行線文とT字文を施す。胎土に細砂を多く含む。淡黄褐色を呈する。

(3) SK139出土土器 (4)

4は $\frac{1}{2}$ 周が残る甗である。口径18.5cm、器高12.0cm。口縁端部がやや内傾する。内外面ともにヘラミガキ。胎土に砂粒を多く含む。淡褐色を呈する。

(4) 包含層(黒色土)出土土器 (5~11)

5は図示できた唯一の中期土器である。短く外反する口縁部をもつ。口縁端面に縄文をめぐらす。頸部に2条の沈線を引きその間に縄文をめぐらす。外面はヘラミガキ。内面上半はヘラミガキ、下半はナデ。胎土に砂粒を含む。淡黄色を呈する。29P-12区出土。

6は赤彩の壺で、図化したのは胴上半以上だが、胴部と底部の屈曲部以下をのぞく上半部の破片がある。口縁部は外反し端部でもう一度外反する。口縁径が胴最大径を上まわらないものである。頸部には櫛描き平行線文と波状文をめぐらせ、推定4か所の垂下文と刺突のある円形ボタン文を貼り付ける。外面と口縁部内面はヘラミガキ。頸部から胴部内面はナデで所々ハケがみられる。胎土に砂を多く含む。黄褐色を呈する。29L-13区出土。

7~10は頸部に櫛描簾状文をめぐらせ、胴上半以上に波状文を施す甕である。いずれも口縁部は外反したのち口縁端部で内湾する特徴がある。外面下半および内面の調整はヘラミガキを基本とし、一部ハケを施す。

7は図上復元、8は略完形に復元できた。10は短い脚台が付くと推定される。

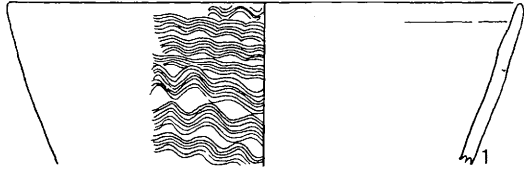
7~10いずれも胎土に砂粒を多く含む。色調は7・8が暗褐色、9が茶褐色、10が淡茶褐色。7が29L-10区、8が29P-12区、9・10が29M-13区出土。

11は蓋で東の飛地30A-9区から出土している。略完形品。つまみの下にハケが残るので外面はハケののちヘラミガキであろう。内面の調整はヘラミガキ状の調整である。胎土に砂粒を含む。淡褐色を呈する。

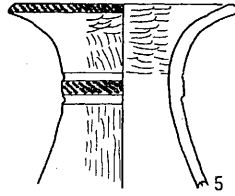
(5) 古墳時代の土器 (12)

12は29O・P-10区から出土した北陸系の甕である(PL-5)。二重口縁で胴内面をヘラケズリする特徴がある。口縁部内外面は横ナデ。胴外面はハケ。胎土に砂粒を多量に含む。淡褐色を呈する。古墳時代初頭におかれよう。

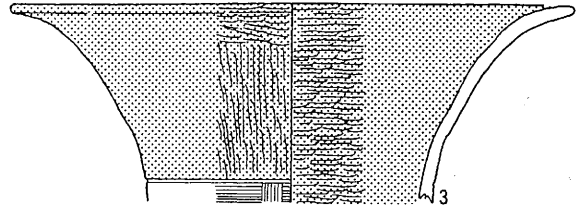
Y 10号住居址



包含層



Y 11号住居址



SK 139

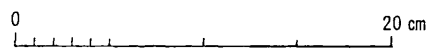
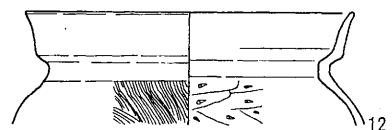
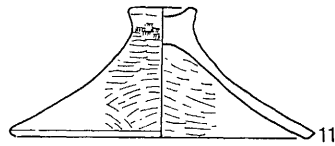
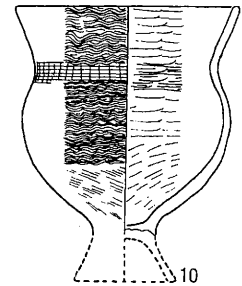
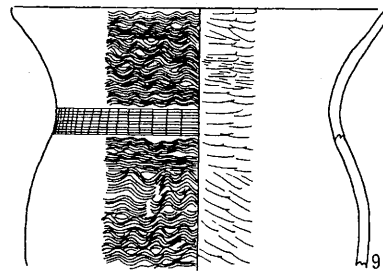
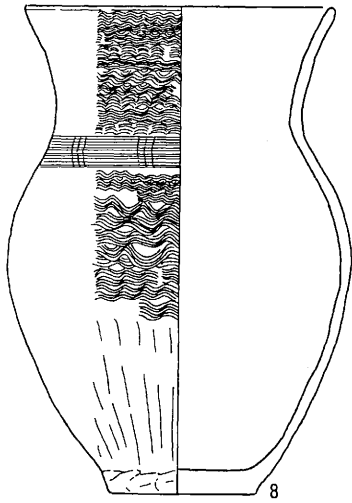
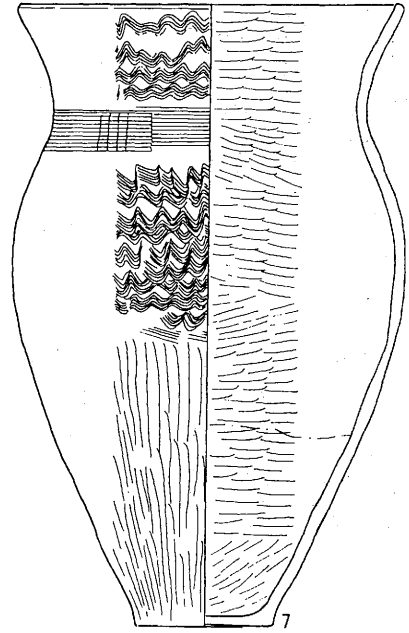
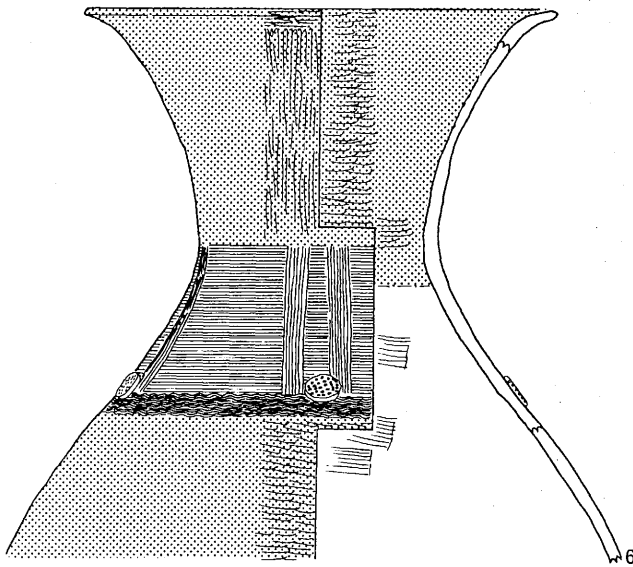
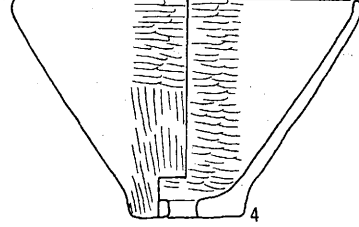


図16 弥生時代の土器 1:4

B 石器・石製品 (図17)

1は石鏃の未製品と思われる。安山岩製。重さ5.8g。29N-12区出土。

2は碧玉製勾玉である。幅1.0~1.1cm。高さ1.25cm、厚さ1.0cmの太くずんぐりとした形態である。穴は片面穿孔。淡緑灰色を呈する。29M-14区出土。

3~5は叩き石で、3は磨り石としても利用している。いずれも多孔質の安山岩と思われる。3~5ともに29Q-11区出土。3が360.7g、4が345.2g、5が249.6g。

6は石錘である。自然石の両端を打ち欠いて挟り縄掛けとしている。29Q-12区出土。重さ355.6g。

7は軽石製の浮きである。上端の一部を欠く。鋭利な刃物で穿った紐通しの孔がある。29Q-9区出土。重さ99.7g。

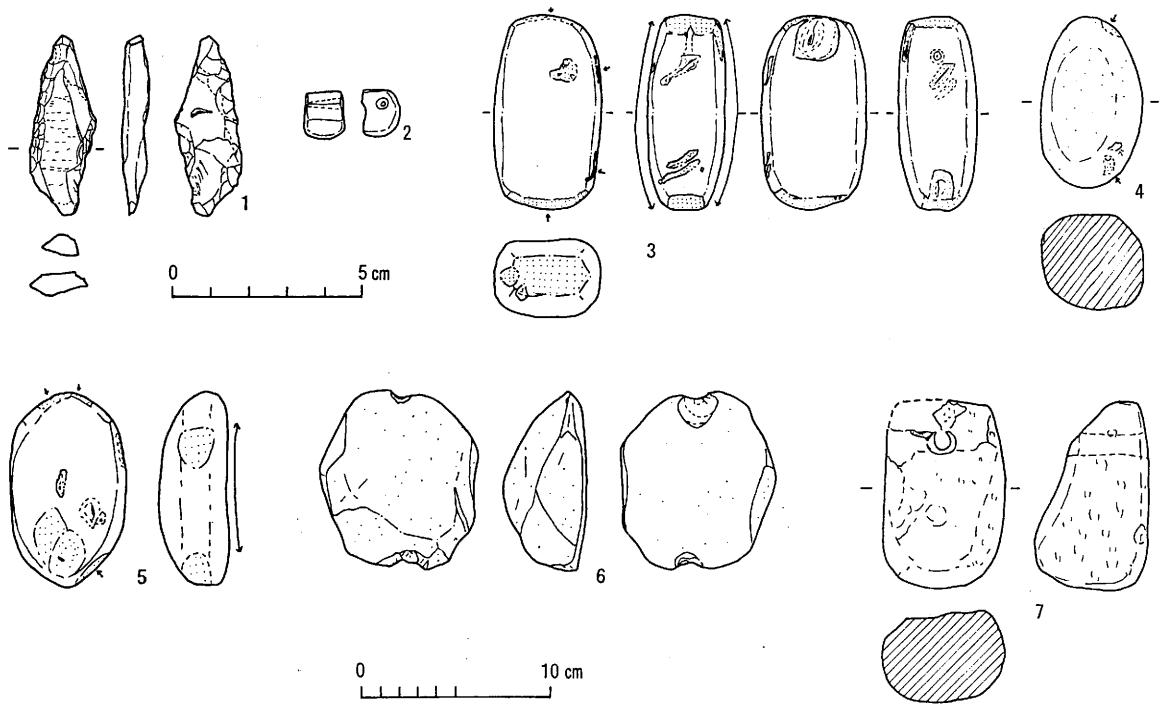


図17 弥生時代の石器 1~2 1:2 他 1:4

第6章 平安時代

1 遺 構

平安時代の遺構は、竪穴住居址 1 棟、掘立柱建物址 2 棟、溝 2、土塚墓 1 基がある。

A 竪穴住居址 (図18)

H34号住居址

変則的な柱穴をもつ竪穴住居址である。29L・M-12・13区にある。南北棟で、南北6.1m×東西4.3mの長方形プランである。床面積は26.2㎡、畳約16畳敷にあたる。当遺跡では平安時代の竪穴住居址の床面積は10㎡(6～9畳)が普通で、20㎡(12畳)を越えるものは大型の部類に入りこれまでに2棟しか例がない。H34号住居址は最大の部類に入る。

セクションベルトでの土層観察によれば、遺構掘り込み面は遺構平面検出面より10cmほど高く、住居址の深さは東側で35cm、西側で20cmである。

床は東側は黄色粘質土だが、西側は漸移層となっており、床の締まりも西側がより堅く締っていた。

主柱穴は長辺の中程に壁に外接してあるP2、P3と考えられる。南辺のP4・P5は入口の柱穴の可能性ある。昨年検出の大型住居址H33号住居址もカマドのある南辺に入口らしき柱穴がある。P2・P3はやや外に向かって掘られており、柱は若干内傾して立てられたと思われる。P6・P7は当住居址に伴うものかどうか確定できない。このような主柱穴をもつ例は当遺跡では3例目である。ただし、H16・H21号住居址(3.3畳・8.5畳)は桁方向にあるのに対し、本例は梁方向にある。

カマドは南辺東端に石で構築されている。原位置を保つものは南壁の2個のみである。石は小児頭大の四角い自然石をそのまま使用する。カマド周囲の床がややくぼみ、中央が焼けていること、カマド内に甕を中心とする土器片が集中していることは、これまでの住居址例に等しい。カマドの西にP1があり、カマド壁体の石と思われる石と、完形ないし完形近く復元できる黒色土器坏が6個体(図21-1・2・3・5・7・8)および甕破片が出土している。土器はカマド出土品とも接合する。カマドを壊した時、つまり住居廃棄時の祭祀ピットであろう。

遺物は他に埋土中から散在的に出土しているが、量は多くない。大型の須恵器(図21-13)はカマドの反対側である住居址北半分の埋土中から破片が散在的に出土している。

B 掘立柱建物址 (図18)

(1) SB19

調査地最高所の29Q・R-12~14区にある。方形掘方をもつ大型建物址である。調査地外へ延びるため棟方向は確定できないが、東は千曲川の崖に近く、地形的に考えると南北棟の可能性が高い。

柱間寸法はP1-P2とP2-P3が2.7m(約9尺)P1-P4とP3-P5が2.4m(約8尺)を測る。P4・P5は柱穴が掘り替えられた可能性がある。

柱掘方は1辺約0.8mの方形で、深さは約0.7m。柱痕跡および柱抜取痕跡は慎重に調査したが確認できなかった。P1から須恵器甕口頸部片が出土している。

(2) SB20

2か所の大型柱穴が東西に並ぶもので、29L・M-14区にある。西側のものをP1、東側のものをP2

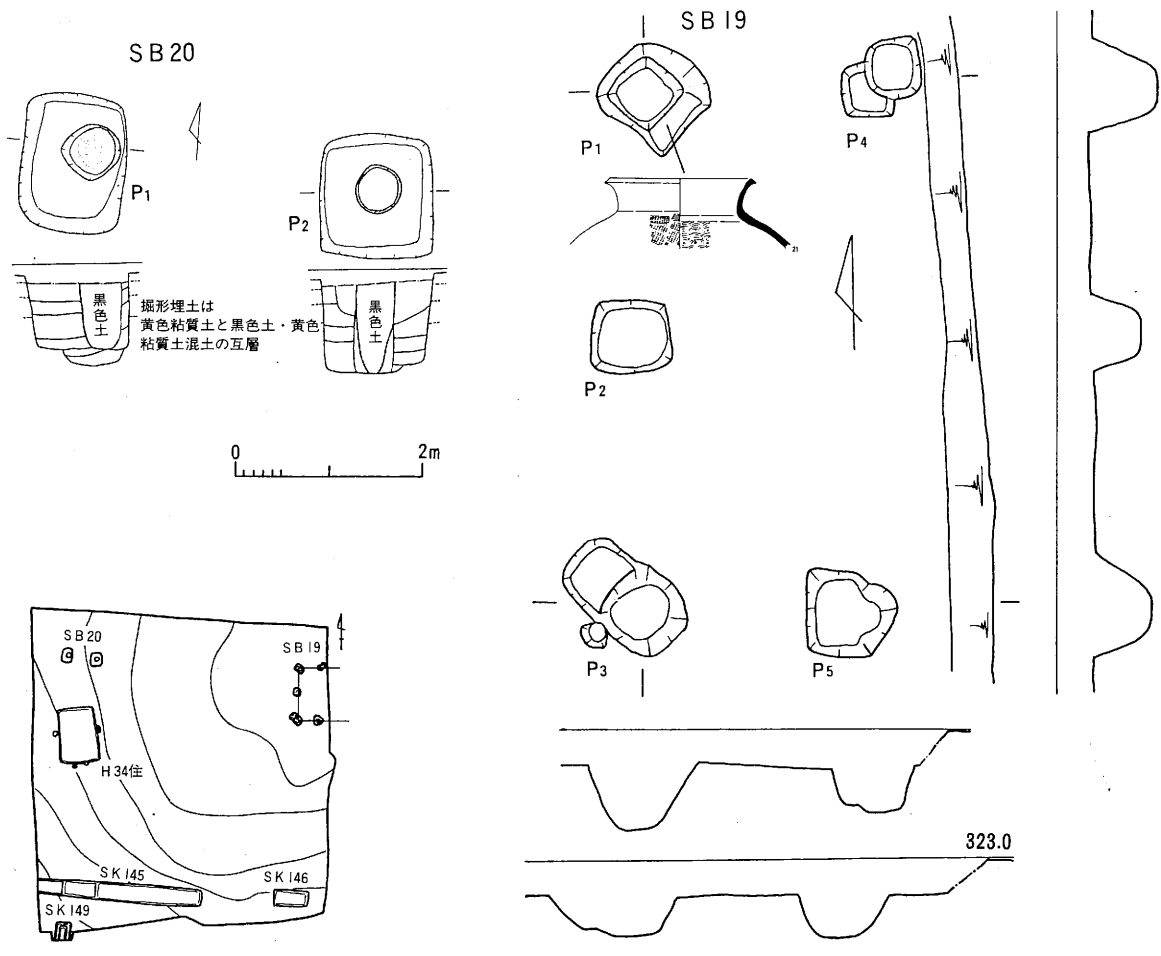
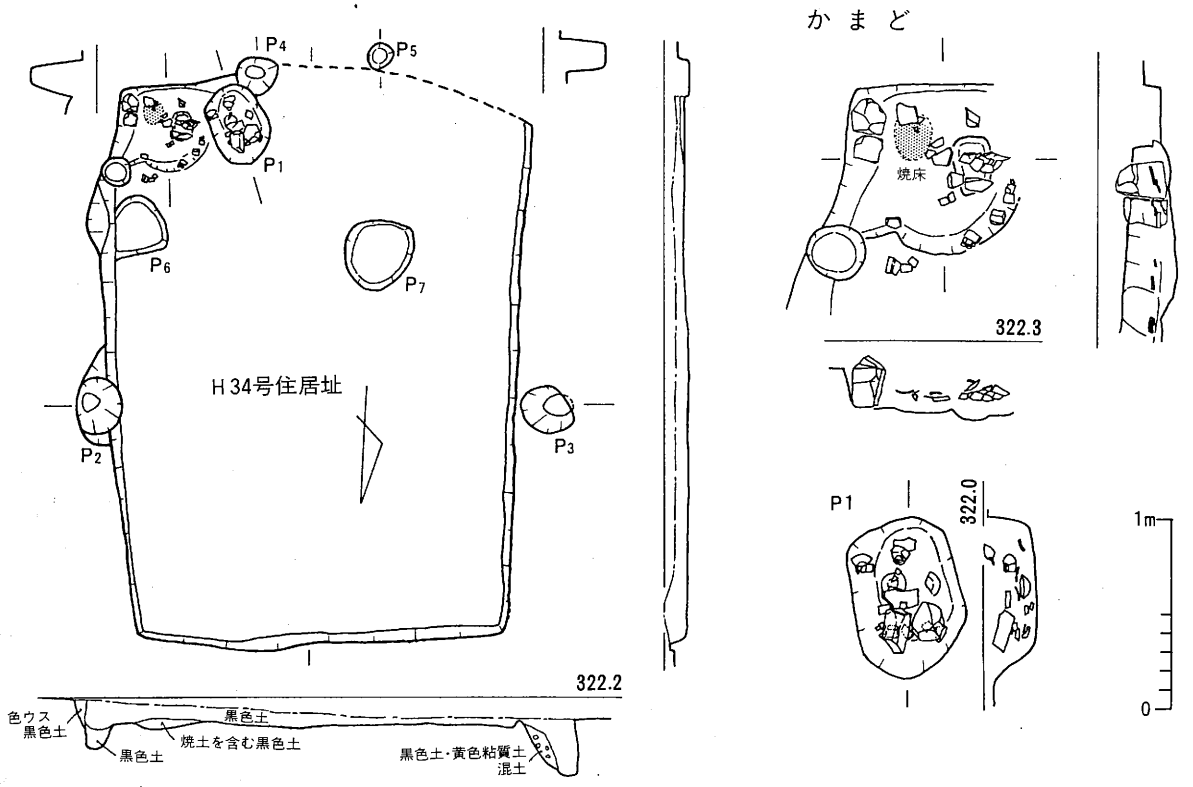


図18 平安時代の竪穴住居址、掘立柱建物址 1:80、1:40

とした。いずれも柱痕跡がはっきりと確認できた。柱痕跡間の心々距離は3.0m(10尺)である。

柱掘方はP1が1.5×1.1m、P2が1.2×1.3mの隅丸方形プランで、深さは両方とも0.95m。埋土は黄色粘質土と、黒色土・黄色粘質土の混土とがサンドイッチ状に互層をなしていた。

柱痕跡は直径約0.4mを測り、黒色土が堆積していた。P1は柱痕跡が掘方坑底までとどいていないが、柱痕跡直下の坑底は他に比べてよく締っており柱は坑底に据えられた可能性が高い。

平安時代の黒色土器坏片が柱痕跡から出土している。

これについては今のところ鳥居や門のような建物を想作している。主軸方位がE8°Sで同E5°Sの敷地を区画するような溝SK145とほぼ等しいことが注意される。

C 溝・土坑

(1) SK145・SK146 (図19)

主軸方位・形態などから一連のものとした。SK145は幅約2.0mで直線的に東西に延びる溝で、17.6m分を確認している。横断面形は逆台形形で、底面は平らである。東端もシャープに立ち上がって終わる。特色は底が段をもつことで確認部分で2段の段がある。そして底は地形に従って西へゆるやかに傾き、段で15cm程上がることをくり返す。方位はE5°S。

SK146はSK145の東約7.7mのところにある長方形土坑で幅約1.8m、長さ3.6mを測る。壁の立ちあがりや深さはSK145に等しい。方位はE4°S。

両方とも平安時代の遺物が両掌に一杯程と遺構の大きさに比べてごく少量出土している。

当遺構の性格については、台地南縁に位置することや、直線的に延びていることなどから敷地を画する溝と考えている。

(2) SK149 (図20)

2段に掘り込まれた木棺墓である。29L-8区にあり南半分は用水路に切られている。上段は幅1.8m×2.0m以上の隅丸方形プランで北辺はややふくらみをもつ。深さは約50cm。底には横木を置いたかのようにくぼみが3か所ある。

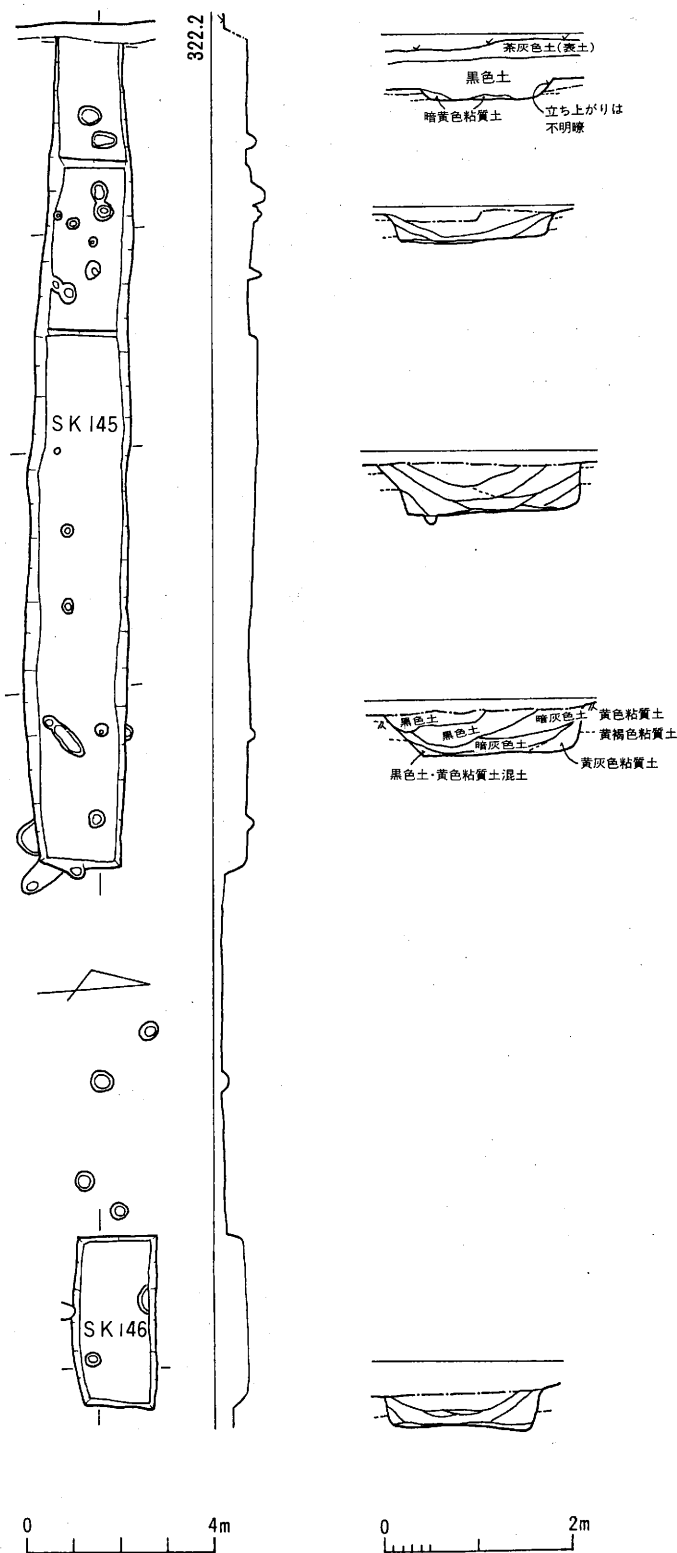


図19 SK145・SK146 1:160 1:80

下段は長さ1.6m以上、幅は北の上端で84cm、下端で70cm、確認南端で上端が77cm、下端が67cmと、北端が少し広い。副葬品の位置からも北が頭と考えられる。鉢底は水平で平らである。

副葬品として灰釉陶器皿4・瓶1、黒色土器坏2が、下段北端から出土している。灰釉陶器瓶は底に横転しており、灰釉陶器皿、および黒色土器坏は正位で並び、黒色土器坏は鉢底に付き、灰釉陶器皿は鉢底より少し浮いて中央に向かってやや傾斜した状態であった。これらの副葬品が棺内であったか、棺外であったか土層観察からはわからなかった。

鉄釘は6本が副葬品の南で鉢底から約5cm上で出土している。銹着した木質の繊維方向をみると頭部はいずれも横、先端部は縦が3横が3で、板の側面から側面に打ち込まれたものと、側面から木口面に打ち込まれたものがあることがわかる。また同様に銹着した木質から板の厚さは3cmと4.5cmの2者があったことがわかる。そして出土位置から釘は棺の両端にのみ使用されていたことがわかる。

2段に掘り込まれた灰釉陶器が副葬されている類例として当遺跡SK32(『上野遺跡Ⅳ』)があり、上段底に横木をわたしたかのようになくぼみがある類例として大倉崎遺跡SK11(『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ』)がある。

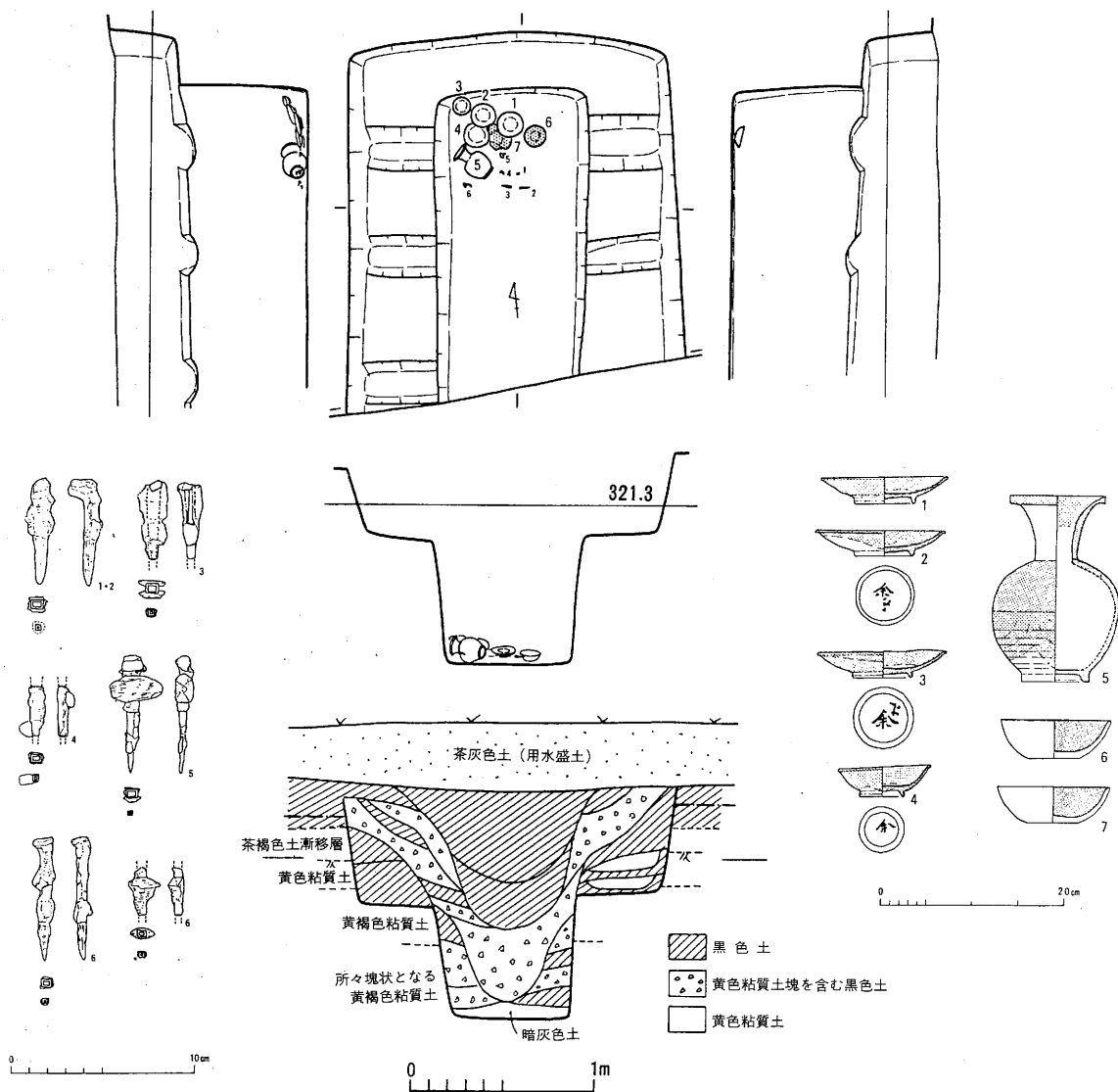


図20 平安時代の墓坑 SK149 1:40

(3) S K 150

単独では図示していないが、29R-8区にあるS K 150も出土遺物から平安時代と考える。規模は1m以上×2m以上、深さ約30cm。調査地外へのびる。平安時代の黒色土器坏片などが数片出土している。

2 遺物

平安時代の遺物はH34号住居址、S B 19柱穴、墓鉦S K 149を中心に出土している。遺物包含層である黒色土からの出土は少ない。

A 土器・陶器

(1) H34号住居址出土土器・陶器 (表2、図21)

黒色土器 坏・鉢がある。坏は体部が強く内湾し、底部にロクロケズリないしへラケズリを加える古相のもの(1・2)から、体部の内湾が弱く底部にロクロ糸切り痕跡を残す新相のもの(7・8)まである。4は灯明皿として利用されたものか口縁部に油カスが付着している。

鉢(9)は片口鉢で、外面に粗いへラミガキが施されている。

土師器 甕(10~12)がある。ロクロ成形の中型の甕で、カマド周辺から出土した。底は図示していないが丸底の破片があるので丸底と考える。口縁部は強い横ナデで受け口状に屈曲するタイプのもので、端部が内傾する越後型は含まれない。

須恵器 大型甕(13)の胴部一個体分の破片が住居址北半部埋土中から散在的に出土している。外面は平行タタキののちカキ目を施す。内面は胴下半にタタキのあて具痕が残る。底部近くはハケが施され、胴上半はロクロナデ。

小結 これらの土器・陶器は当遺跡のこれまでの出土例から、H17号住居址出土品と形態・組成がよく似ている^(注1)。当遺跡の灰釉陶器は猿投黒笹90号窯式期から折戸53号窯式期を中心としている。H17号住居址例、本例は黒笹90号窯式の新しい段階に併行すると考えている。絶体年代は檜崎・斉藤^(注2)に従えば10世紀前半におかれる。

注1 『上野遺跡Ⅳ』 1994 飯山市教育委員会

注2 檜崎彰一・斉藤孝正『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』 1983 愛知県教育委員会

(2) S K 149出土土器・陶器 (表2、図22)

木棺墓の副葬品として完形品が7個出土している。

黒色土器 坏(14・15)が2点ある。いずれも体部の内湾が強いタイプのものである。残念ながら底部調整は器壁の損傷がはげしく不明瞭であるが、ロクロケズリないしへラケズリを施している可能性が高い。

灰釉陶器 皿・瓶がある。皿は口径約14cm、器高2.7~2.9cmのもの(16~18)と、口径9.5cm、器高3.2cmの小型品(19)がある。いずれも口縁端部は外反し、高台はくずれた三ヶ月高台である。灰釉は見込みを除く内面と口縁部外面にうすく刷毛塗りされている。素地は淡灰色で、砂粒・黒色熔出粒を含む。17~19には「余」と判読不明の文字が外底面に墨書されている。

瓶(20)は口縁端部が肥厚する長頸瓶である。釉は刷毛塗りで、頸部外面は施釉されない。素地は淡灰色で砂粒・黒色熔出粒を含む。

これらの灰釉陶器は皿の法量と施釉法から猿投黒笹90号窯式期に比定でき、高台が典型的な三ヶ月高台ではないことから同窯でも新しい段階に比定されよう。

(3) S B 19・包含層出土陶器 (図22)

21はS B 19-P 1から出土した須恵器甕口頸部である。外反する短い口頸部をもつ。体部外面は格子タタ

キ、内面は同心円タタキ痕が残る。素地は灰白色。黒色熔出粒を含む。

22はL-14区出土の須恵器壺の底部である。素地は灰色で、砂粒を含む。

(4) 墨書土器・線刻土器 (図22)

23~25は黒色土器坏の体部外面に墨書されている。23は「休」であろう。底部調整はヘラケズリ。24は「巾」の左が払い、横画が右の跳ね上げとなるもので、巾の下端が口縁端部。よく似た例が、当遺跡H17号住居址・H32号住居址にある。それは「常」に似た文字の巾部が当例と同じものである。当例の字の大きさや坏の大きさから考えると常に似た文字の巾部の可能性が高い。25は「一」のみが残っている。底部調整はヘラケズリ。

26は黒色土器坏の外底に「×」の線刻がある。×は鋭い刃先で刻まれている。底部はロクロ糸切り痕を残す。

B 鉄製品 (図22)

SK149から鉄釘が6本出土している。いずれも角釘である。現状では断面は中空である頭は四角く偏平で、頸は少し屈曲する。全形のわかる1・4・5でみると長さは6~6.5cm。木質が銹着しており、釘に対して木質の繊維の方向が縦位の所と横位の所がある。頭部はいずれも横位であり板の側面から打ち込んだことがわかる。先端は1・5が縦位で木口に打ち込んだことがわかる。2・3・6は先端部も横位で板の側面から側面に打ち込んだことがわかる。横位の繊維の銹着から板の厚さが1が3.0cm、2が3.3cm、4が3.0cm、5が4.5cmと推定できる。

H 34号住居址

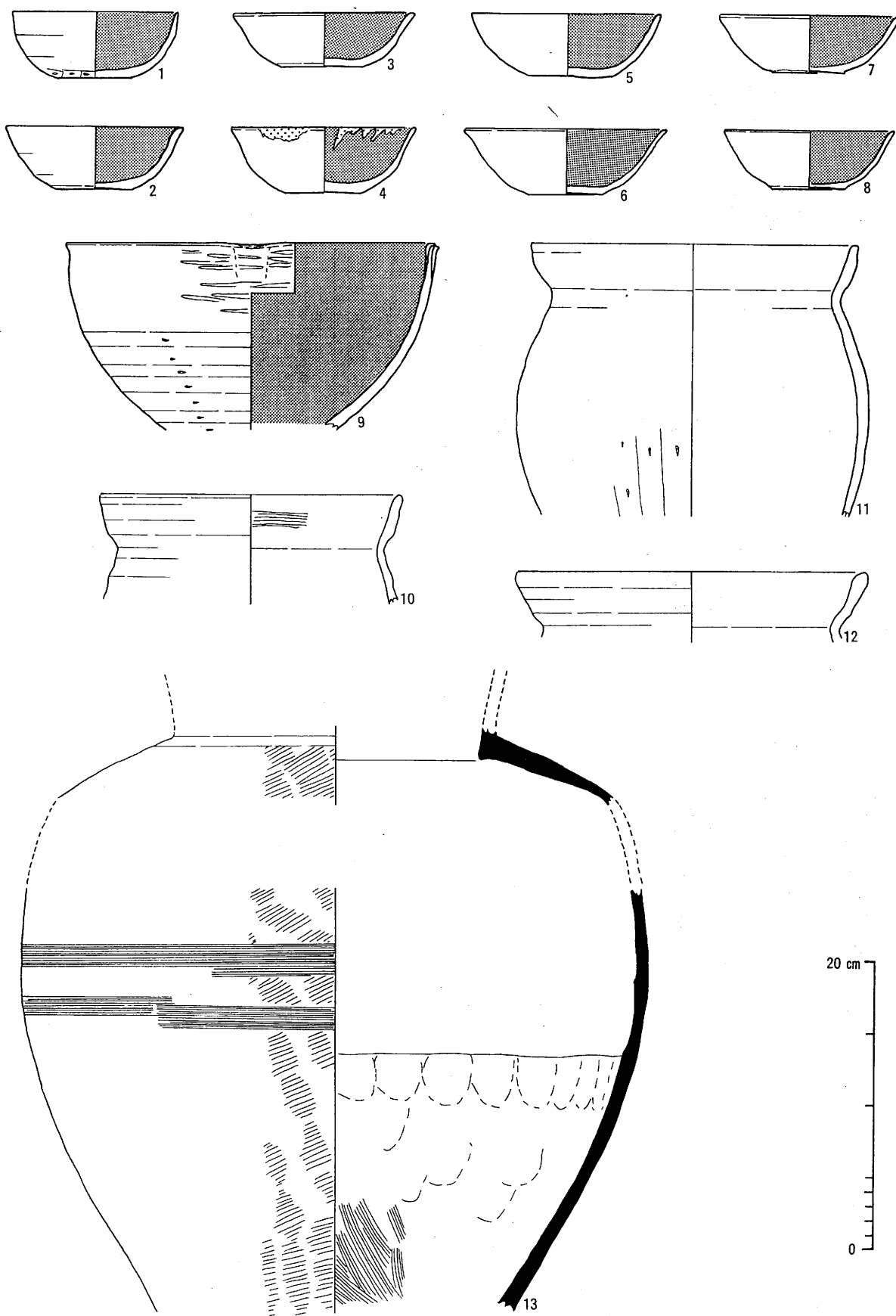
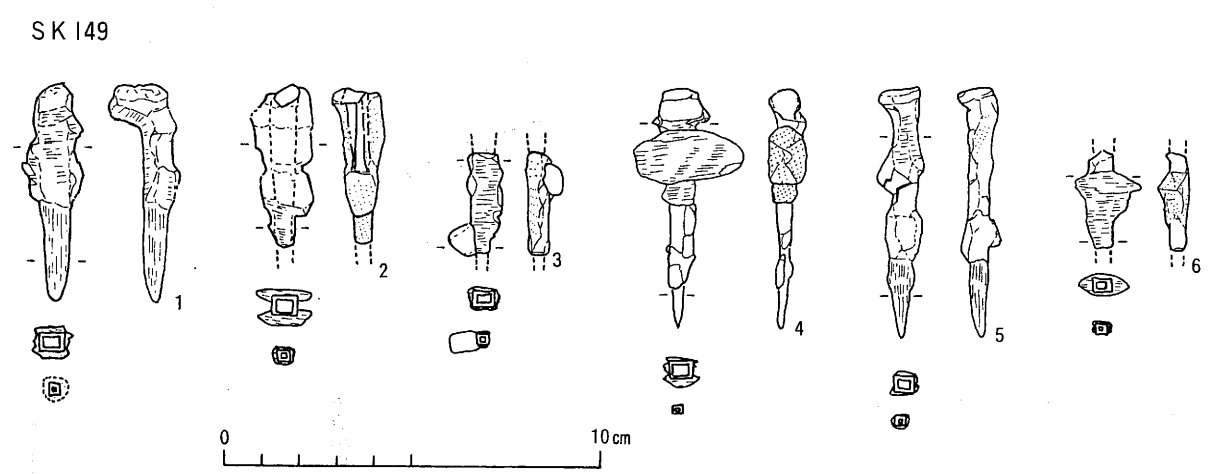
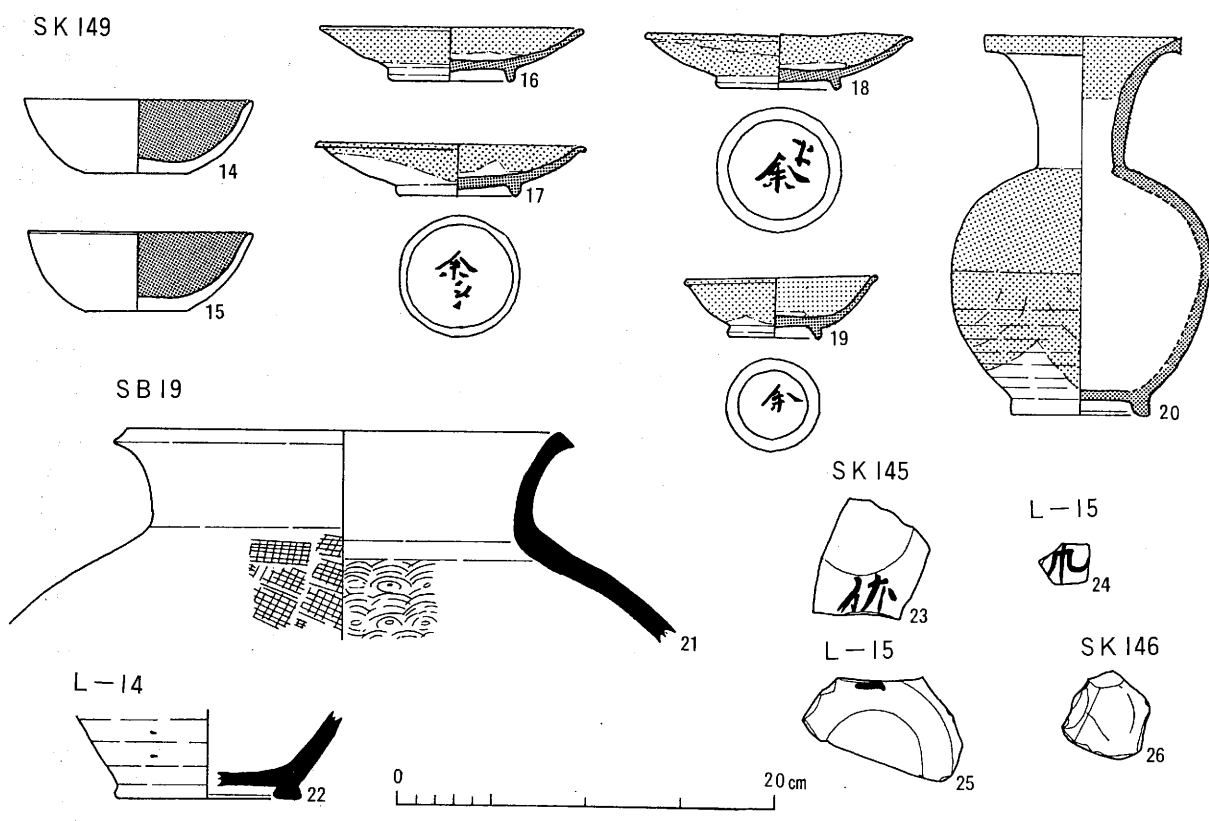


図21 平安時代の土器・陶器(1) 1:4



参考資料

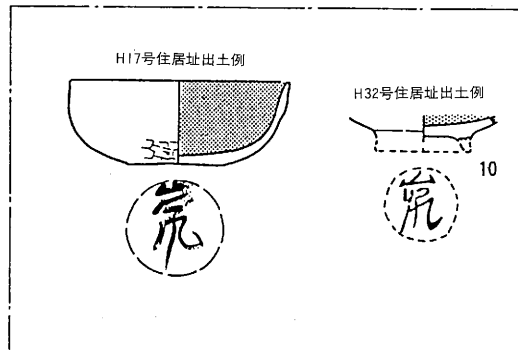


図22 平安時代の土器陶器(2) 1 : 4 鉄製品 1 : 2

表2 平安時代遺構出土土器一覧表

※ 黒 黒色土器 須 須恵器 (単位はcm) 糸切りはロクロ糸切り

H34号住居址

器種	器形	図番号	口径	器高	底 洞 径 径	底部調整・他	備 考
黒 色 土 器	坏	1	11.7	4.6	5.1	ヘラケズリ	P 1 残50%
		2	12.4	4.4	5.1	ロクロケズリ	P 1 残50%
		3	13.6	3.7	5.9	ロクロケズリ	P 1 残100%
		4	13.0	4.6	5.2	糸切り残る	油カス付着 残90%
		5	13.2	4.2	5.7	〃	P 1 残70%
		6	14.2	4.6	5.2	〃	内底に炭化物 残60%
		7	12.6	4.0	4.8	〃	P 1、カマド 残60%
		8	11.8	4.1	5.1	〃	P 1 残40%
		—	14.6	4.5	5.7	〃	
		—	—	—	6.2	ヘラケズリ	
		—	—	—	6.0	糸切り残る	
	—	—	—	5.3	〃		
	鉢	9	26.2	—	—	ロクロケズリ	片口鉢 残30%
土 師 器	甕	10	21.4	—	—		カマド、P 1
		11	22.8	—	24.6		カマド 口・胴一周
		12	25.0	—	—		カマド
須	甕	13	—	—	44.2		

S K 149

器種	器形	図番号	口径	器高	底 洞 径 径	底部調整・他	備 考
黒	坏	14	12.2	3.9	5.3	ロクロケズリか?	完形品
		15	12.0	4.2	5.3	〃	〃
灰 釉 陶 器	皿	16	14.1	2.9	6.4	刷毛塗り	〃
		17	14.3	2.7	6.0	〃	〃 墨書あり
		18	14.0	2.9	6.2	〃	〃 〃
		19	9.5	3.2	4.4	〃	〃
	瓶	20	10.4	20.0	7.2	〃	〃

第7章 ま と め

「今の上野辺りは湖底に没した水族の棲処となりし者ならんと。思いきや……上野を経しに此の辺りの畑中往々土器の破片あらんとは……一二の石鏃も拾い得たり……此の地亦早く「コロボックル」の住地たりし事明かなり」。『人類学雑誌』第20巻第128号に「北信濃地方の石器時代遺跡」と題して、宮沢甚三郎氏が現飯山市、木島平村、野沢温泉村各地の出土遺物を紹介した文章の一節である。上野遺跡が学界誌上に初めて登場した記念すべきものである。今から約100年前のことであった。

昭和63年に始まった上野遺跡の調査は、今回で6回目である。いつまで続けば終熄するのであろうか。いつまで続く“ぬかるみ”ぞという感が深い。6回目ともなると浅学菲才の身にとっては、最早や“まとめ”をどう書けばよいのか甚だ困却してしまう。いきおい“まとめ”もマンネリ化してしまう。愚痴はこれ位にして今回調査の成果について簡単に触れていこう。

今回の調査でも、やはり旧石器時代の遺構・遺物が出土した。恐らく上野丘陵一帯に旧石器時代の遺跡が存在するのであろう。上野の地がいかに旧石器時代の人々にとって、対岸の日焼とともに魅力ある土地であったかが容易に首肯されるところである。

縄文時代では、早期・前期・後期の土器が若干ずつであるが発見されている。早期については、当地方一般に認められる押型文土器と絡条体圧痕文土器の破片である。押型文土器が発見されたことで、旧石器時代に引き続き縄文早期の時代にも上野の地に人々が住み続けたことが判明した。ただ、今までの調査でもそうであったが、縄文土器は発見されるものの住居址の発見はない。上野の地が住みやすいために、次々と人々が来住し攪乱してしまったせいであろうか。多分縄文時代後期に属するものと推定して間違いのないと思うが、漁具として石錘、軽石製浮子が発見されている。千曲川と人々との係り合いを示す資料として重要である。この種の遺物は飯山地方では東原遺跡に出土しているのみである。

今回の調査での圧巻は、平安時代中期に位置づけられる木棺墓の発見である。残念ながら南半分は用水路によって切りとられてしまい、全容は明確化できないが、おおよそは推定できる。2段に掘り込み、下段に棺をおきその上に横木を置いた三本の凹が認められた。また副葬品としては、灰釉陶器皿・瓶・黒色土器坏などあり、当時の埋葬のあり方を示している。木棺の板の厚さも釘から推定できる。ここに埋葬された人物は、当時あっては貴重品と思われる灰釉陶器などを副葬品とし、更に木棺に入れられて埋葬された点からすると庶民階級でなく、上野を中心として近辺の村々を支配する在地領主クラスの墓とみてよいであろう。このような例は、市内では旭小佐原でも発見されており、平安時代中期における地方の墓制を知る上で、貴重な資料である。

以上、今回調査の成果について概略を述べてきたが、「一本の幹線道路が通れば、それはついに一本では終らず、次々と道路が結びつけられ、自然は破壊に瀕し、遺跡は壊滅にさらされる」という見本を上野遺跡にみる事ができた。確かに117号線小沼・湯滝バイパスが敷設されて以来、交通は至極便利になり、雪深き飯山地方にも次々と生活革命がおこっている。この便利さとひきかえに私達は、貴重な自然や文化財を失っていく。

低地林としては、植相が豊富できわめて貴重な存在であるとされた“上野の森”も今や虫喰いだらけの林地と化し、植物の種類は減少し、お世辞にも緑豊かな林とはいえない。早急に“上野の森”の保存計画をきちんと立てないと近い内に森は姿を消してしまうであろう。併せて、埋蔵文化財も滅び去るであろう。

末尾ながら、調査に協力いただいた上野地区の区長さんはじめ区民の皆さん、作業員の皆さんに心よりお礼申し上げる次第である。

PLATE

PL 1



◀ 樹木かたづけ
重機による表土はぎ



◀ 基準杭打ち



◀ 調査地全景

PL 2



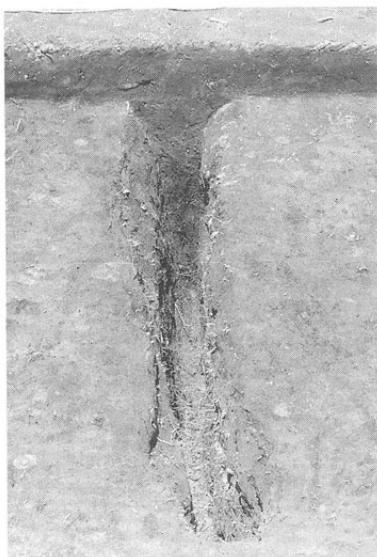
◀ 9号礫群, 南西から



◀ 同上近影



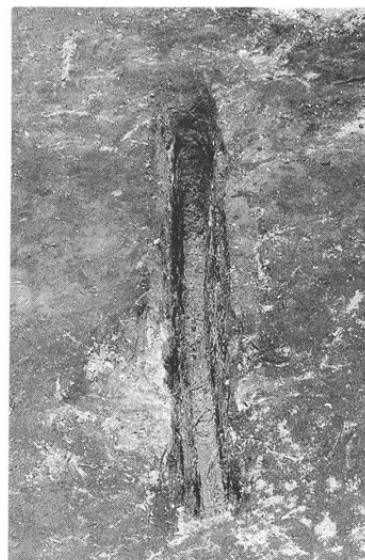
◀ 29L-9区頁岩製石器
出土状態、東から



▲ S K 142 南から



▲ S K 143 南から



▲ S K 144 南から



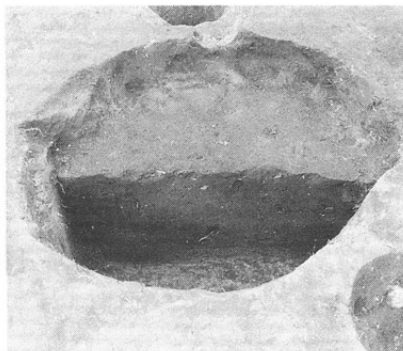
▲ S K 147 北から



▲ S K 148 北から



◀ Y 11号住居址 南から



▲ Y 10号住居址
P5 半割状態 南から

◀ Y 10号住居址 南から



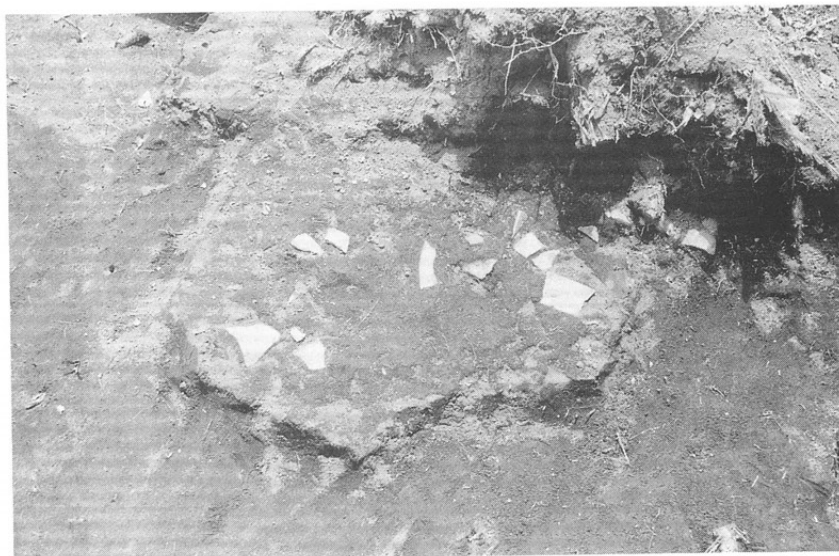
◀ S K 139 西から



▲ S K 140 西から



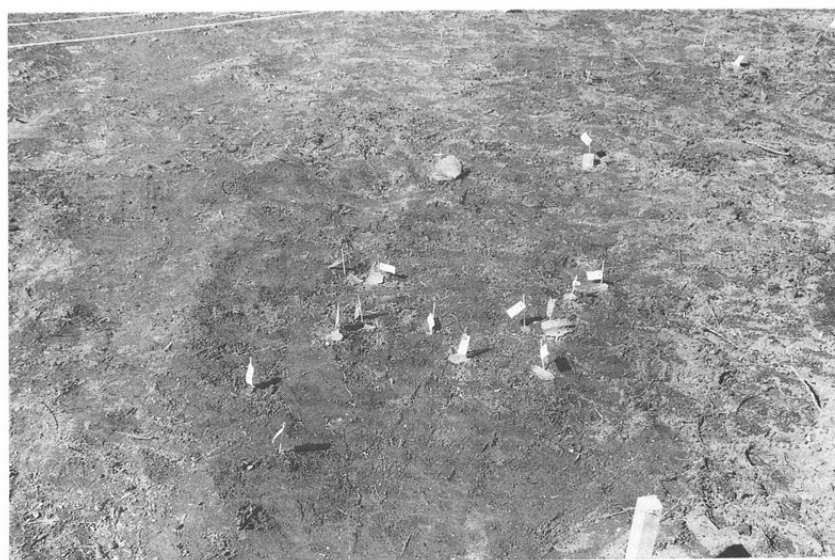
▲ S K 141 南から



◀ 29L-13区弥生後期赤彩壺
出土状態 北から



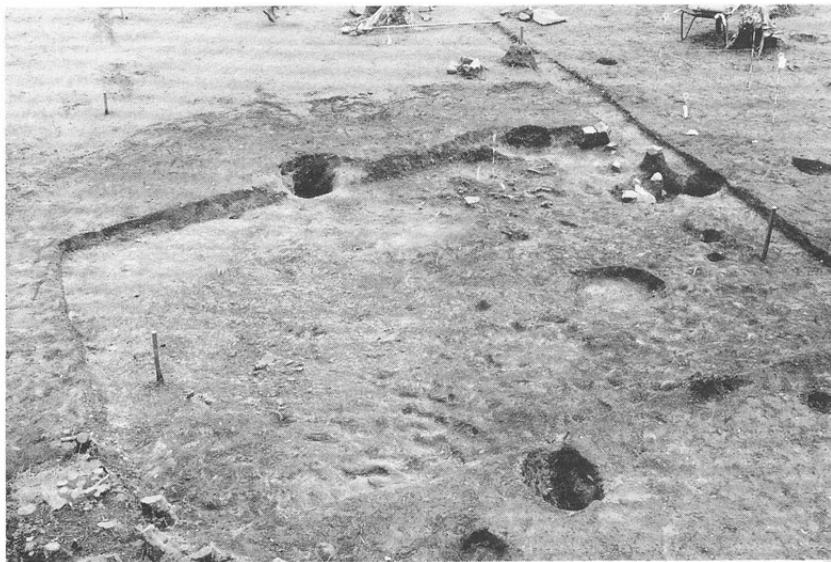
◀ 29P-12区弥生後期甕
出土状態 西から



◀ 29O・P-10区古墳時代初頭
甕出土状態 南から



◀ H34号住居址掘り下げ
南から



◀ H34号住居址完掘状態
北西から



▲ H34号住居址カマド 北から



▲ 同 左 P 1 西から



◀ 平安時代大型掘立柱建物址
S B19 南から



◀ 同 S B20 柱穴平面
検出状態 南から



◀ 同 半割状態 南から



▲ S B20 P1 柱痕跡 南から



▲ 同上 P2 柱痕跡 南から



▲ S K 145 西から



▲ 同左完掘状態 東から



▲ S K 146 西から



▲ S K 150 北から



◀ 平安時代木棺墓
S K 149 北から



◀ 同上副葬品出土状態
南から



◀ 同上土層 北から



▲ 30区の調査 西から



▲ 30区完掘状態 西から



▲ 調査初期 ジョレンがけ精査



▲ 木株の処理



▲ 調査地西半分ジョレンがけ



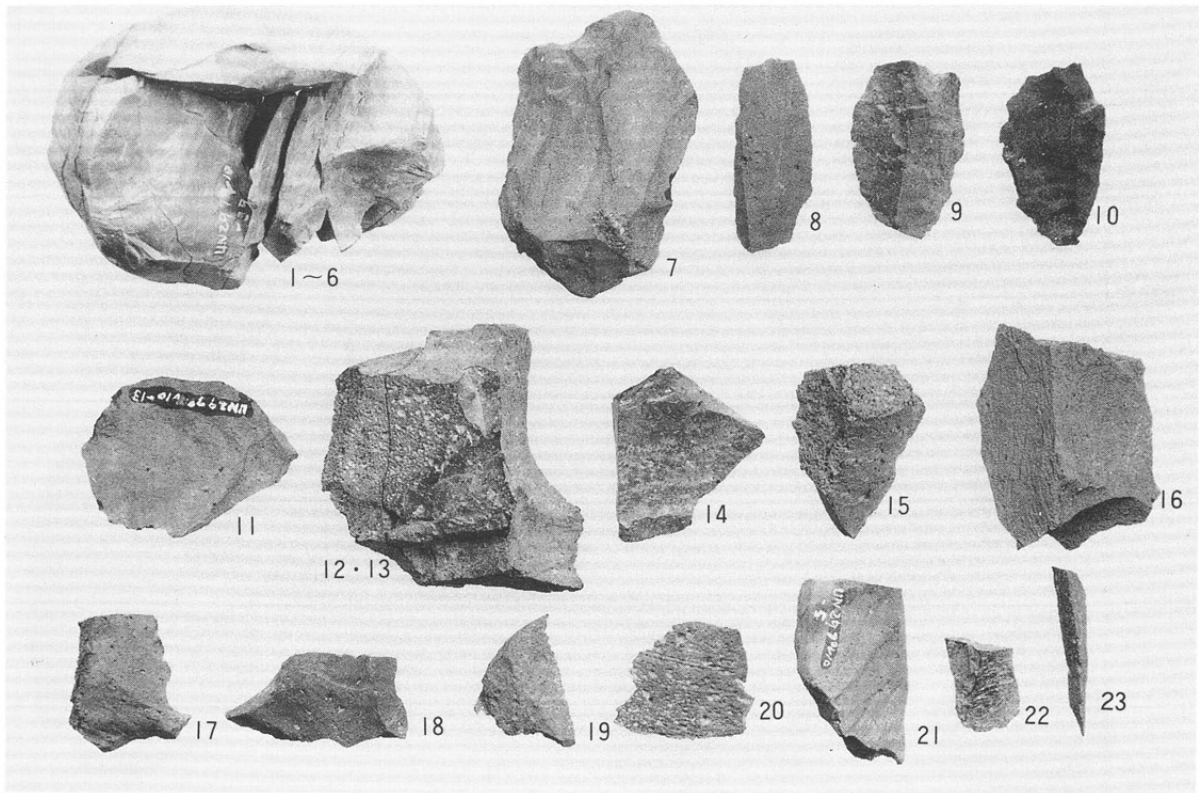
▲ 遺構掘り下げと測量



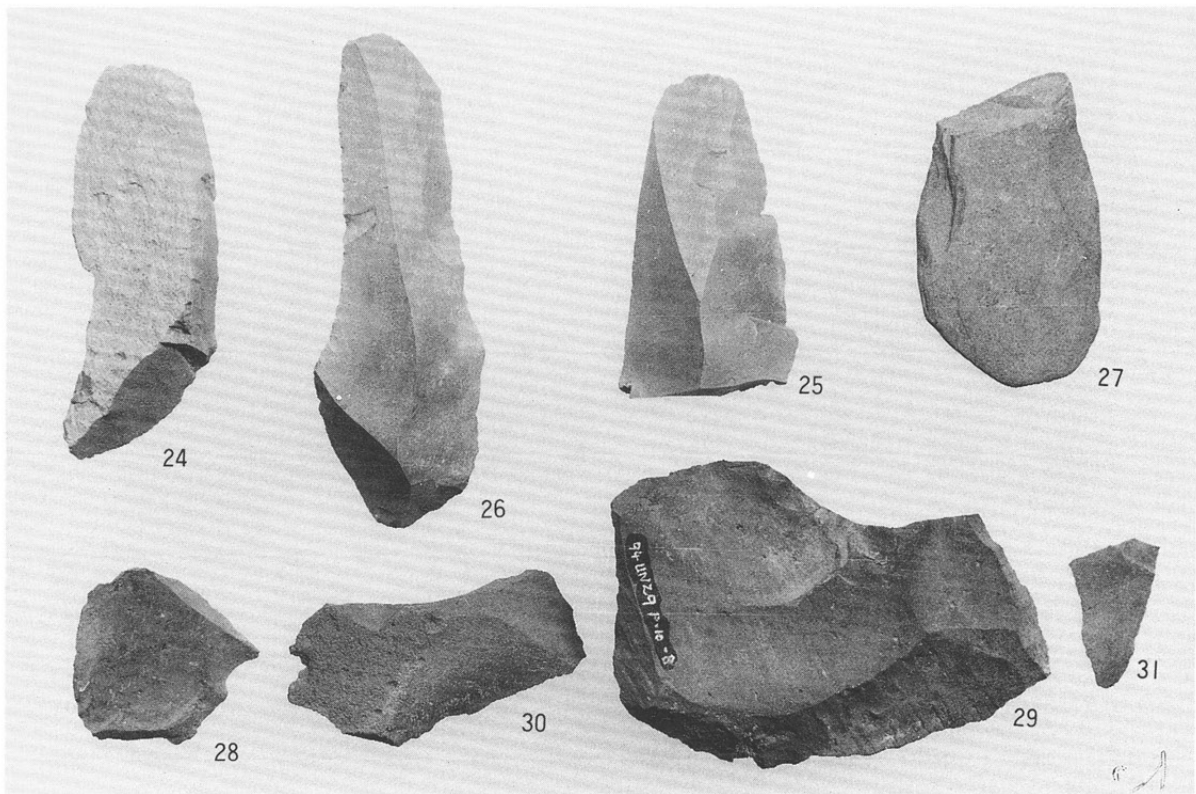
▲ 遺構掘り下げ



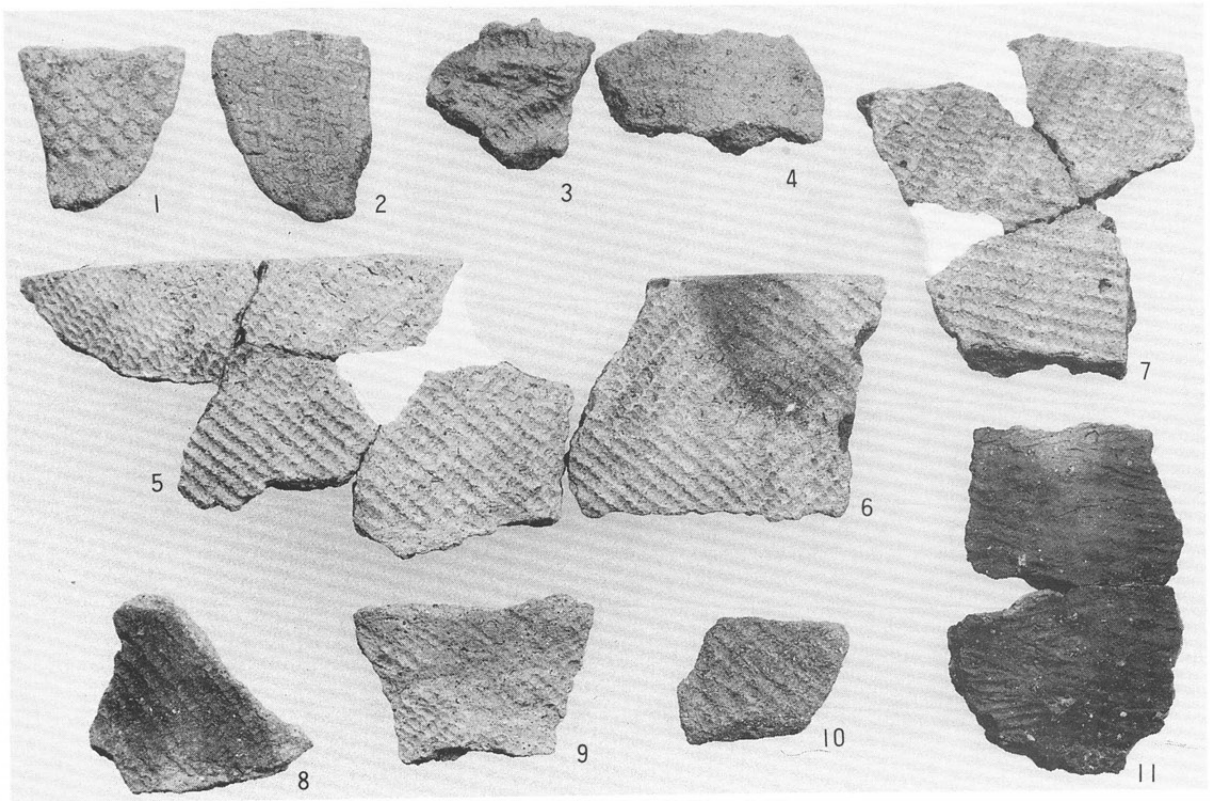
▲ 発掘現地見学会 H6.6.20



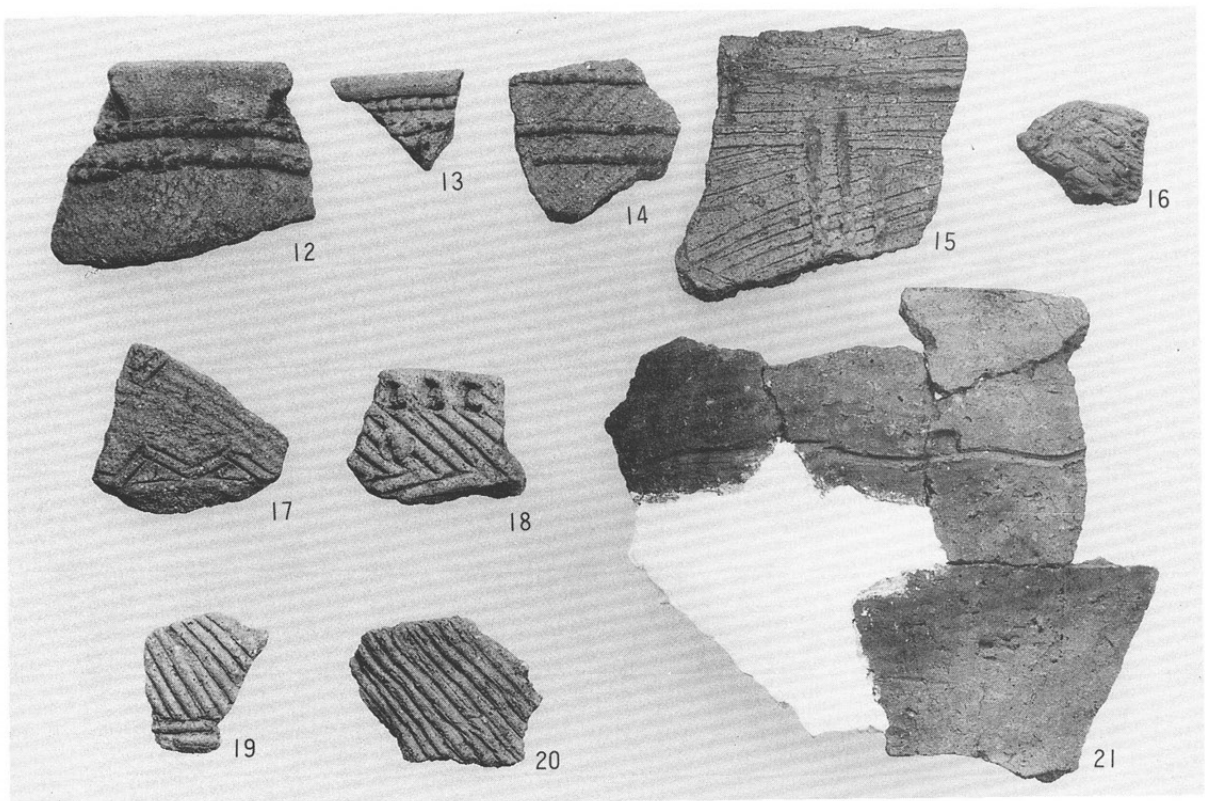
▲ 9号礫群出土旧石器



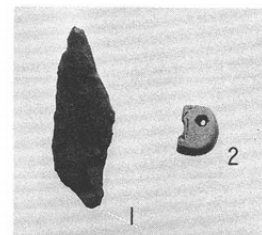
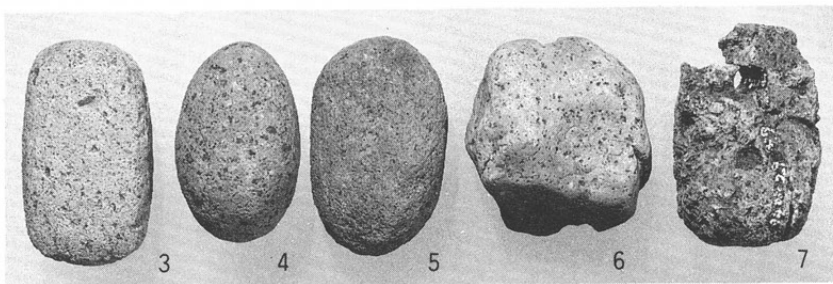
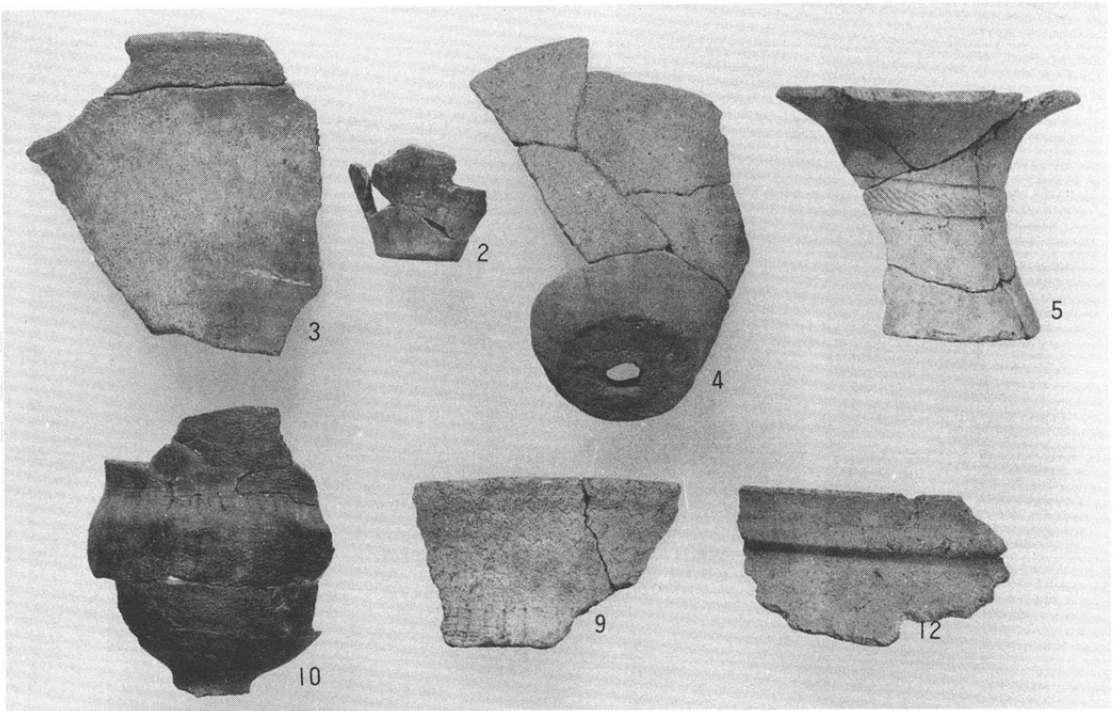
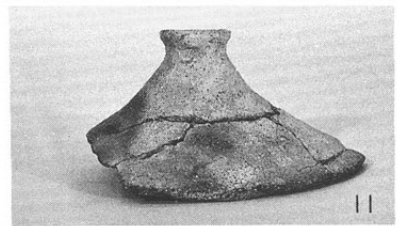
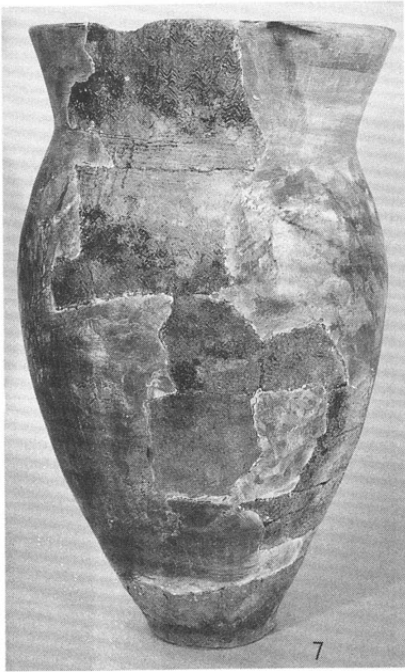
▲ その他の地点出土旧石器

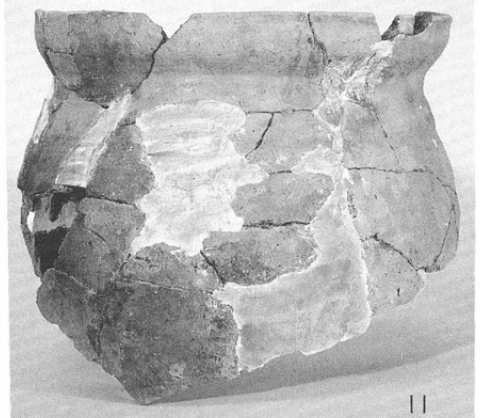
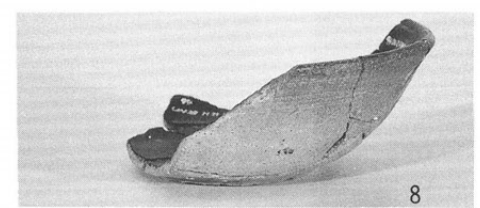
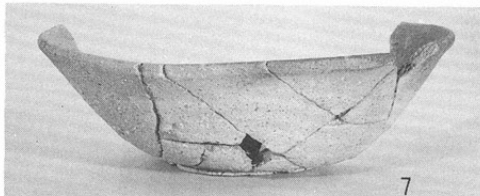
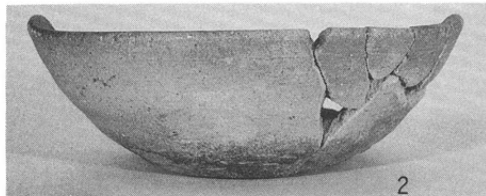


▲ 縄文時代早期・前期の土器



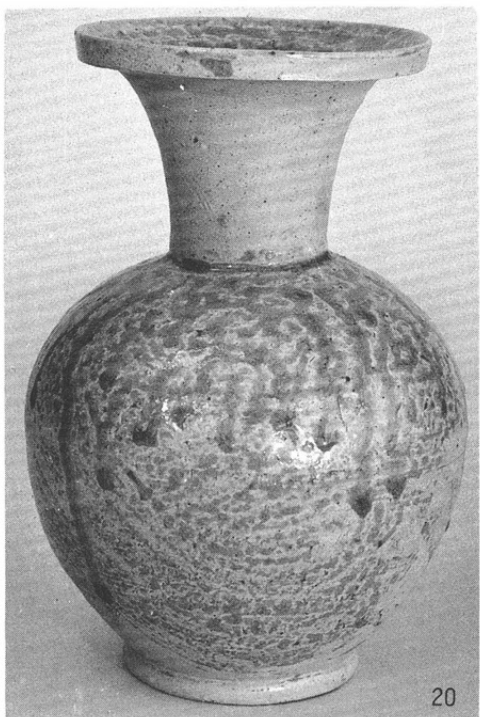
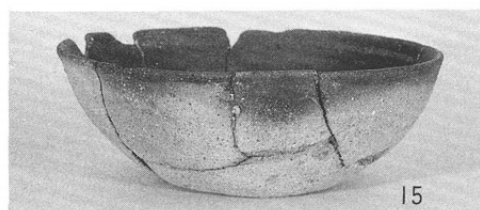
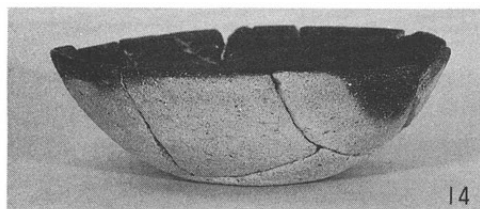
▲ 縄文時代前期・後期の土器

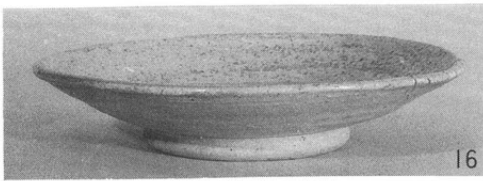




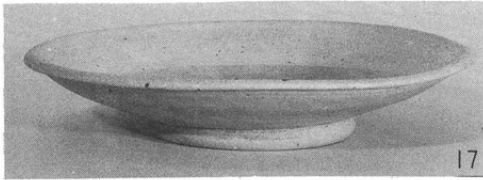
▲ H34号住居址出土遺物

SK149
出土遺物 ▼

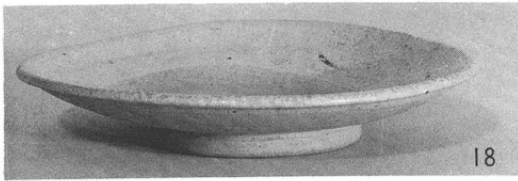




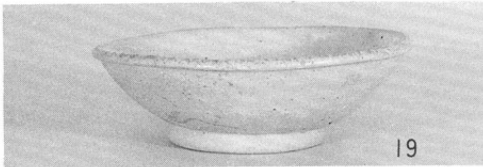
16



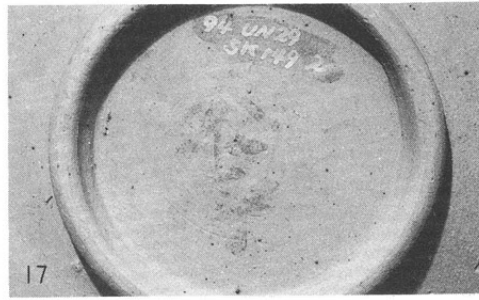
17



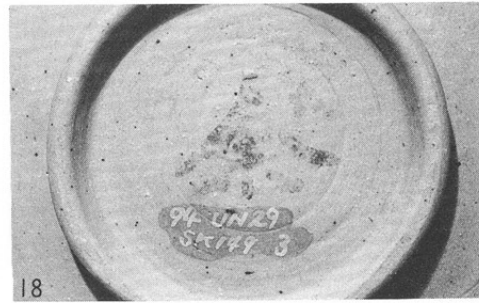
18



19



17



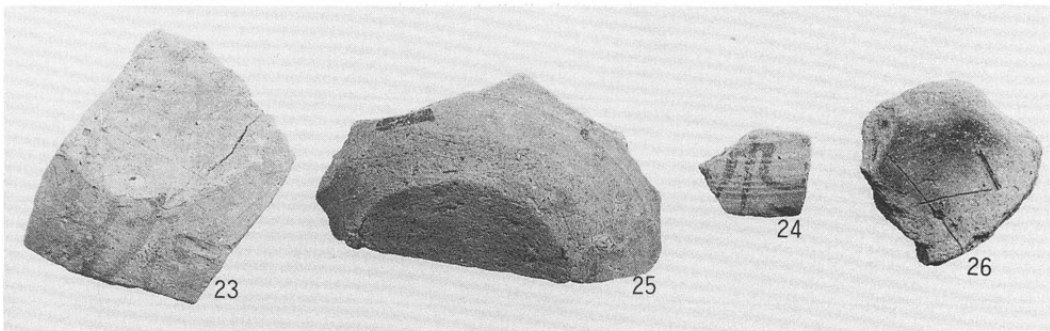
18



19

▲ SK149出土灰釉皿・同底の墨書

▼ 墨書・線刻土器



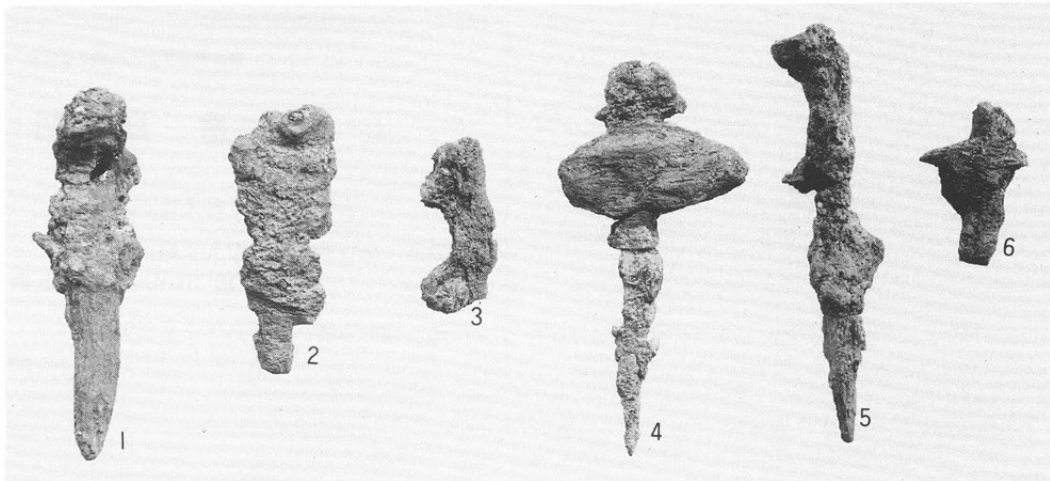
23

25

24

26

▼ SK149出土鉄釘



1

2

3

4

5

6

飯山市埋蔵文化財調査報告書 第43集

上野遺跡 VI

平成7年3月1日 発行

編集・発行者 飯山市大字飯山1110-1
飯山市教育委員会

印刷所 飯山市大字常盤5733-1
(有)岸田孔版印刷所

